

井上賴圀先生校閱  
小森甚作  
上地信成 合編



女流文學史 全

東京 東洋社



自序

我國文學の中にも、取りわきて和歌和文こそ、女子には適すべきものなれ。女子はよろづ優美なるを尙びて、輕燥浮華なるは好ましからず。されば容裝も華麗ならんよりは、優美なるべし。言行も輕薄ならむよりは、優美なるべし。而して紅閨の裡、翠帳の下、花を偲び、月に啣ち、螢に思ひを焦がし、雪を松が枝にめづるにも、また優美なる思想を選ばむことを要す。和歌和文は、これ優美なる思想を顯はさむには、最も適するものなれば、女子たるもの、内治の餘暇には、これを弄ばむ事こそ望ましけれ。

抑女子の文學は、男子の文學と異なり、勇壯活潑なるを避け、溫順優雅なるべきは、其性質自らこれを示せり。彼の日月の明なる、一は陽にして、その光赫烈たり、一は陰にして、その光鮮妍愛すべし。

而して、日月並び運行して萬物を化育し、天地間自然の美を呈す。文學に於ても亦然り。男子は日光の如く、強かるべく、女子は月光の如く、やさしかるべし。もし、これに違はんか、各その本色にあらず。

眞淵翁曾て奈良朝を男子の國といひ、平安朝を女子の國といはれけるが、げに雄渾壯大なる奈良時代の文學は男らしく、優美濃艶なる平安朝の文學は女らしくして、明らかにその相違を見るなり。次に鎌倉時代の文學は、武家思想の入りたるがため、勇壯活潑となり。室町時代は、僧侶隱士の手に移りたるがため、悲哀寂寞に傾き、徳川時代に至りては、よく和漢文の調和を得たるがため、平易流暢となり。大に俗文學の流行を來せり。いづれも各時代に於て一得一失あれば、讀者は宜しくその長所を學ぶべし。これ即

ち文學史を繙くの一必要なる所以なり。然るに、世にいまだ女子文學の歴史を叙したる書なし。豈遺憾ならずや。著者はこゝに鑒みる所ありて、此編を爲す。素より匆卒の際になりしものなれば、誤謬なきを保せず。將來識者の指示を得て、益完全ならしめんことを切望す。

萩の雫を硯に受けて

月影清き窓の下に

明治三十四年九月中澣

著

者

識

凡例

一本書は我國女流社會の文學を叙して、なるべく作例の範圍を廣め、其材料豊富ならしめたり。これ讀者をして、各時代文體の變遷を知らしめんと、の素志より、その煩を顧みず、かくは編纂したるものなり。

一本書中上古時代に於て、作者の傳記と作例とを別ちたるは、古事記萬葉集中に詠歌の僅に一二首を認むるのみにて、傳の如きも極めて簡單なれば、和歌など一所に記して、互にその優劣を比較する便宜を與へたるなり。

一本書は匆々の際になりし者なれば、文字の誤植及び脱落せる所なきを保せず、そは再版の折を待ちて改むべし。

女流文學史下卷目次

第三期 武家時代の上

總論

第一章 散文

第一節 雜史

第二節 軍記物

第三節 物語及び隨筆

第四節 日記及び紀行

第二章 韻文

第一節 當時の歌體

第二節 勅撰集

第三節 撰集家集及び百首、千首、歌合

第四節 今様及び連歌

第三章 作者傳及び作例

- 一、俊成の子・和歌……………二四
  - 二、式子内親王・和歌……………二八
  - 三、阿佛尼・夜の鶴、うたゝねの記、和歌……………三三
  - 四、辨内侍・辨内侍日記……………四〇
  - 五、建禮門院・建禮門院集……………四三
  - 六、二條院讃岐・讃岐家集……………五〇
  - 七、中務内侍・中務内侍日記……………五五
  - 八、千代能・地獄極樂論……………六〇
  - 九、嘉喜門院・和歌……………六二
  - 十、小野菊女・消息文一篇……………六八
  - 十一、小野通子・淨瑠璃物語・消息文一篇……………七一
- 新古今集以下十三代集、武人妻妾の和歌廿三首、今様歌九首

第四期 武家時代の下

總論

第一章 散文

- 第一節 和漢混和體……………九六
- 第二節 日記及び紀行……………九九
- 第三節 和文集……………一〇二

第二章 韻文

- 第一節 當時の歌體……………一〇四
- 第二節 私撰集及家集……………一〇五
- 第三節 俳諧の發達……………一〇八

第三章 作者傳及び作例

- 一、田捨女・俳句……………一一一
- 二、祇園梔子・梔子の葉……………一一四
- 三、京極忠尚の女・涙草……………一一七
- 四、智月尼・俳句……………一二一
- 五、百合子・小百合葉……………一二六

六、正親町町子：松蔭日記……………一二九

七、秋色：俳句……………一三一

八、園女：兄弟は他人の初論：俳句……………一三七

九、井上通女：東海紀行：歸家日記……………一四六

十、律女：遊女讚、廣澤の記……………一五四

十一、千代尼：四民論、千代尼句集……………一五九

十二、歌川：俳句……………一七〇

十三、月屋倭文子：消息文一篇……………一七三

十四、白柏子武女：庚子道の記……………一七六

十五、鶴殿餘野子：さほ川集、長歌、送別……………一八一

十六、荷田蒼生子：杉のしづ枝、梅をめぐる記……………一八八

十七、土岐筑波子：筑波子家集……………一九五

十八、菱田鑊子：郭公の初音をきく……………二〇二

十九、千枝子：山水の繪を見て、隅田川に舟を浮ぶる辭……………二〇四

廿、荒木田麗子：大江の賦、池の藻屑、后午日記……………二〇八

廿一、只野稜女：磯傳ひ……………二一八

廿二、花讚女：句集……………二二一

廿三、土屋茅淵女：旅の命毛……………二二八

廿四、多代女：句集……………二三一

廿五、太田垣蓮月尼：海人の刈藻……………二三七

長歌十三首

# 女流文學史上卷

井上頼圀先生校閱 小森甚作  
上地信成 合編

## 總論

文學とは西洋の所謂リテラチュールの義にして、其意義甚だ廣く、之が定義を下さんは古來學者の難しとする所なり。故に從來文學を解せし人は、各その見解を異にし、文章そのものを以て文學とするあり、或は文字によりて言語を表出せるものを凡て文學なりと説くあり、或は人意を智識感情の二つに別ち、智識によりて表はるゝものを科學とし、感情によりて表はるゝものを文學として説けるあり、又文學は一の技術品にして、繪畫、彫刻など、同性質の物なりと云へるありて、未だ一定の定義を下したる人あるを聞かず。

要するに、文學は強て定義を附せずして可ならん。然れども、余輩は今本書を編するに當り、假に左の定義を下せり。即ち文學とは、各自の思想感情を文字に表出し、人々に快樂を與ふるを以て目的とするものにして、散文、韻文の二つより成れるものなり。

文學は最もよく、人の思想感情に伴ふものなれば、其時代の政治、宗教或は人情、風俗の變遷により

て、常に動搖せらるゝものなり。されば之によりて、各時代に於ける當時の人情は更なり、風俗、嗜好等に至るまで、其蹤蹟を探り、或は人智の盛衰を悟り、而して自己の思想感情をして、優美高尚ならしむる等、皆文學の効なり。

今左の四期に分ちて、我國に於ける文學の大勢を略記せん。

**上古** 既に記せしが如く、文學は各自の思想感情の文字に現はれたるものなりとすれば、其始め不文時代に於ては、文學なかりしかと云ふに然らず。文字こそなければ、上古に於て吟誦せし和歌の類は、もとよりこれ文學の實質たりし也。然れども、上古は頗る文學幼稚の時代にして、只古事記、日本紀等に載せたる和歌によりて、其痕跡を認むるのみなりしが、奈良朝に至りては、文字の使用もやゝ自由になり、加ふるに片假名の發明などありければ、一層自己の思想を記す事に便を得、茲に始めて散文なるもの現はれたり。又韻文に至りては、萬葉集の撰さへありし程なれば、歌人數多輩出し、盛に之を研究したるより、遂に韻文上に於て、一種萬葉調なるものを構成したり。而して此時代には、漢學及び佛教の流行すると共に、漸く支那思想、印度思想の國內に傳播せし爲め、和歌の發達上少しく妨害せられし傾向ありたり。然れども、平安朝の如き急劇なる變化はなくして、尙ほ古代淳樸の風を存したり。

**中古** 平安時代に至りては、散文最も隆盛を極めし時代にして、上下三千載嘗て其比を見ざるなり。

抑當時は、藤原氏の豪奢、佛教の迷信等盛に人心を支配したりしかば、事皆優麗艶弱に流れしが、却て女子の性情にや適したりけむ、女流作者盛に輩出して、堂々たる大宮人を凌駕せり。後世國文學の至寶なりとて賞讃せらるゝ、源氏物語を初め枕草子などの書は、皆女子の手になれり。また當時代に至りては、散文の隆盛なるに伴ひて、奈良朝後歌界も寂寞たらんとせしを、幸に和泉式部、赤染衛門以下の女流によりて、其光輝を放つに至れり。要するに、當時の文學は、女流の專有物なりし、といふも敢て過言にあらざるなり。

**近古** 鎌倉時代となりては、爾來大宮人に排斥せられたりし武家勃興して、封建の風を構成し、武人の天下を支配するに至りしより、王政頗に廢頽し、爲めに文學は一時暗黒時代となりたり。然れども、細かに觀察を下す時は、殿上人の手を離れて、隱士の間で潜めるもの、如く、且當時は佛教を崇拜するもの多かりしかば、其影響として文學は一に僧侶の手に歸し、平安の艶麗優雅なる散文體は一變して、厭世的文學となり、又一方には漢文脈を有する戰記類など顯はれ、所謂鎌倉文學なるもの起りしより、散文韻文共に全く女子の手をはなれたり。故に當時に於て、阿佛尼の作を除くの外は、散文として見るべきものなし。室町時代に至りては、矢叫びの聲、弓弦の音の絶間なく、人々日々干戈を事として、文學を講究するの暇なく、爲めにさしも盛なりし鎌倉文學は、退歩して宮廷の一部及び五山の僧徒間に於て、漸く其命脈を保持せしのみなりき。尙此時代の末期に至り、僧侶の手によりて、



謠曲、連歌など現はれたれども、女流の作者としては一人も出でざりき。

近世 江戸時代は、始め漢學盛に流行して、國文學は微々として振はざりき。中頃に至りて、荷田春滿、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤などの國學者續々現はれ、一時埋伏せし平安文學の復興を計りしかば、其門下に秀才雲の如く起り、或は古代の風俗を討査し、或は古文辭の研究に力を盡せり。加之、各藩又競ひて斯學を獎勵せしかば、元祿以來の國文學は大に見るべきものあり。されども當時代は、平安時代と異り、研究時代なれば、其著書には、源氏物語枕草子に次ぐべきもの出でざりしこそいと遺憾なれ。されど女流の作者はなかくに多し。中にも麗女の文章、蓮月の和歌、千代の俳句などは、よく當時代を、代表すべきものなり。尙小説の現はれしが如きは、一層文學の進歩したるなり。以上各時代に於ける文學は、其時代を形成し、又その時代の人物を養成したるが故に、文學史に就きて各時代の人物を觀察する事の必要なるは論を俟たず。

要するに、我邦の文學は所謂樂天主義にして、希臘の天地開闢にして、天氣晴朗、山水美麗なるを以て、國人その天地を愛するが如く、我國人も亦、仰では芙蓉峰の美觀を賞し俯しては琵琶湖の清徹に掬び、或は花鳥に謠ひ、風月を親しむ等、天地自然の美を愛するに於ては、各國異ならざるなり。されば彼の街塵を避けて山中に其觀を貪らんとし、或は罪なくして配所の月を見んとする類は、皆是自然を樂しむものにして、全く厭世主義にはあらざるなり。

かくの如くにして、我國の文學は、上下三千年來の人心を支配したりき。今之を神武帝以降、左の四期に分ちて、古來女性の思想感情が、散文、韻文上に現はれて、如何に變化發達し來れるかを記さん。

- 第一期 王朝時代の上 (上古より奈良朝迄)
- 第二期 王朝時代の下 (平安時代)
- 第三期 武家時代の上 (鎌倉室町時代)
- 第四期 武家時代の下 (徳川時代)

# 第一期 (自紀元元元年至紀元千四百四十四年)

## 王朝時代の土

### 總論

我國上古文學の實ありしと雖も、いまだ之を表はすの具なかりき。されば、言語を以て相互に自己の思想を通じたるのみにして、今の世にありて、文章を綴りて各自の意思を述ぶるが如き便利は無かりしなり。故に之を不文時代と名づく。かくの如き、上古の文章は傳はらざれども、和歌は口々に謠歌して、今日に傳はるもの多し。さて此和歌は、即ち不文時代に於ける一の文學にして、若し之を除かんか、上古の真正なる文學は、他に求むること能はざるべし。

かくの如く、我國の文學は、その始め韻文より發達したるものにして、古事記神代の卷を見ても、素盞鳴尊の御歌を始めとして、八千矛神、沼河姫、須世理比賣など、何れも御歌のみ傳はれり。然るに神武帝以後に至りては、歷代の天皇、后妃その他貴紳の作など多く見ゆ。降て奈良朝に及びては、文字の使用自由になりければ、和歌に志すもの次第に多くなり行き、遂に萬葉集の如き歌集さへあらはれて、益々韻文學の隆盛を來せり。

散文の始めて現はれしは、奈良朝にして、即ち古事記、祝詞、宣命及び風土記等はなり。然れども是等は、皆韻文と其命脈を共にし、互に相混和したるものなれば、平安朝の如く純然たる散文にてはあらざりき。而して當時の散文たるや、概ね公卿の手になりしものにして、女流の徒に至りては少しもこれにあづからざりしもの、如し。されば當時代に於ては、散文に就きては云ふ所少なく、韻文の方は記す所多かるべし。

### 第一章 文字の發達

我邦の神代文字の有無に就ては、古來學者間に議論多くして、本居翁は無とし、平田翁は有とし、其他甲論、乙駁、其何れなるかは今猶詳かならず。

然らば、始めて文字の表はれしは、何れの時代なりしかと云ふに、崇神帝の朝、即ち紀元六百年代に漢字始めて渡來したるに起因せり。然れども當時は、只國內一部分のみ通用して、一般には及ばざりしなり。其後應神帝の朝、百濟より阿知伎、王仁、の來朝して、以來漢學は漸次國內に廣まるに至れり。此兩氏は河内、大和、二ヶ國を賜ひ、世々此國に住して、文書を掌る、これを東西史部と云ふ。降て履仲帝の朝には、詔して諸國に史部を置き、雄略帝の朝には、東西の史部に命じて、出納を勘録せしめ、欽明帝の朝には、船賦を記さしめ給ひしが如きは、大に漢字獎勵の源となり、遂には漢

字の用法も進歩し、漸次之を使用して我國語を寫すに至れり。然れども尙不便の事もありしにや、天武帝の時に至り、境部石積さかひのいしつみに命じて、我國に適用すべき新字四十四卷を作らしめ給ふ。此後にも屢々作るものありき。然れども、漸次漢學の進歩するに従ひ、其用法も自由になり、歌謡の如きも、之によりて寫し得るに至り、遂に古事記、日本紀、萬葉集、などの大著述あらはれたり。こは實に、我國文學に長足の進歩を與へし原因にして、假名文學の發生又これに起因せり。

奈良朝に至りて、片假名なるものあらはれたり。此に就ては、種々説ありといへども、要するに、漢字の複雑を避けむが爲めに、例へば僧侶等が菩薩を井と書き、菩提を井など書きしが如く、世人其便を計り、いつしか零字を作り出だしたるものならん。

此名義に就ては、二説あり。一は漢字の傍に附する假名とし、一は漢字の傍を取りし故なりとせり。思ふに、既に先輩も云へるが如く此假名は、佛徒間に早く發達せしものならん。

世に此作者を、吉備眞備とすれども、こはさにあらず、前述の如く、佛徒間に誰れ作るとなく、簡を計りて使用せしが、遂に一種の字體を構成したるならん。明魏の作なる反切義解に、吉備公の作とせるも、恐らくは作にはあらず、散在せる假名を五十音に排列せしならん。黒川博士は、片假名は平假名製作と同時代なり、との説なれども、余は暫く從來の説に従ひ此處に記す。

## 第二章 散文學

散文は文字によりて、初めて其形體をあらはするものなれば、我邦上古不文時代には、散文として見るべきものなし。

散文の初めて發生せしは、漢字傳來後にして、やゝ光輝を放つに至りしは、千三百五十年代なり。散文の骨髄たる祝詞は、漢字傳來後三百八十年後にあらはれ、古事記は、四百二十七年の後にあらはる。其他宣命、風土記、皆四百年代にあらはれ、韻文の發達に伴ひて、頗る發達したり。されども、前述の如く、當時代の散文は未だ韻文めきて、平安時代の如く純然たるものならず。今之を左の二節に分類して、畧記せん。

### 第一節 古事記及び日本紀

古事記 三卷 古事記は、我が散文界の祖にして、和銅六年五月成れり。初め漢學渡來し、韓人歸化する者多きに至り、古傳説の混亂を恐れ、天武帝、舍人稗田阿禮とらひのあのれをして、舊辭即本辭を暗誦せしめ、更に材料を集めて、國史を編せむの御心なりしも、中途にして崩じ給ひければ、元明天皇其志をつぎ給ひ、太安麻呂たやすまろをして、阿禮の暗誦せる舊辭を筆記せしめらる。和銅六年三卷の書成る、これ今に傳ふる古事記なり。此書、天地開闢より筆を起し、推古帝にて終を結べり。其文章は漢學の音訓を

使用して、言辭を筆記したるものにて、其體裁に至ては、日本紀の如く、華麗なる文字を使用せずと雖も、純粹なる國語を寫したるものなれば、我邦上古の言辭、風俗、を知るには、實に唯一の寶典なり。本書を研究せんには、(神代は古史傳を見るべし)

古事記傳 四十八册

本居宣長著

古事記標註 五册

數田年治著

日本紀 三十卷 古事記修撰後八年、元明帝の養老四年成る。本書は古事記の撰定と其趣を異にし、歴史の爲めに編みたるものなれば、更に廣く材料を集め、事柄を詳細に記さんとしたるより、往々世の俗説をも取りたるなり。天皇これを、舍人親王、及び太安萬呂、紀清人、に勅して、撰ばしめ給ふ。今世に存する日本書紀三十卷これなり。

本書は専ら漢書に準じて、編年體に書紀し、往々華麗なる漢文を使用して、修飾を施したれど、歌謠に至りては、純粹の國語を以て寫せり。本書記する處、上は開闢より下は持統帝に至る迄、細大漏らす處なし。本書の註解としては、

日本紀通解 三十五册

谷川士清著

書紀集解 十卷

河村秀根著

### 第二節 祝詞宣命及び風土記

右三種は當表題の下に必要なけれど、これ又當時、散文の首位を占めしものなれば其概要を記さん。

一、祝詞 其文字ころ漢字なれ、文章は純然たる國語を以て、寫したるものにして、殊に優美嚴肅なる語を用ひ、又聲調の佳ならんを欲し、對句を設け、句節を正し、神明も感賞し給はんばかりに作り。此起原に就ては不詳なれども、加茂眞淵翁は、出雲國造神賀壽詞は、舒明帝の御代に、大祓詞は、天智天武帝の御代に作られたり云々。本居宣長翁は此說に従はずして、大祓、大殿、御門祭などの詞は、既に神武帝の朝にありたり云々。余按ずるに、本居翁の言は云ひ足らざれども信に近きが如し。古語拾遺に中臣祓詞は、神武天皇の時、天種見命が作られしとあり。又大殿祭は、延喜式にありて時代は詳ならざるも、いと古き者なるべし。平田篤胤翁も本居翁と殆んど同説なり。

祝詞考 三册

加茂眞淵著

二、宣命 これは國語を以て作れる、國風の詔にして、名稱は王命を傳宣するとの謂にして、皇室の典禮、祭祀、叙任、等に關する詔に用ふ。これに對して事、國家に關する事件は漢文に書し、之を詔勅と云ふ。宣命は高橋氏文に見えたるが最も古く、續日本紀中にあるもの之に次ぐ。其註釋書は、

歷朝詔詞解 六册

本居宣長著

三、風土記 地理書なり。初め和銅六年五月、元明帝五畿七道に勅して、土地の名稱、及び風土、産物、古傳説を録し奉らしめ給ふ。され共中には、奉らざりしものあらん。又中途にして散逸せしものあり。

らん。今傳はるは、常陸、播磨、出雲、豊後、肥前、等にして、常陸出雲の外は皆古書に引用せられて存するのみ。全文を見る能はざるは遺憾の極なり。

標注古風土記 一册

古風土記逸文 二册

栗田寛著  
同

### 第三章 韻文學

抑も詩歌は、折にふれ物に感じて、己れが思想を云ひあらはしたるものなれば、聽者をして同感を起こしめざる可らず。古人の、歌謡は言語の音樂なりと評せしむる可なり。當時の和歌は實に言語の音調の佳なるを尙びて、後世の如く、一定の規矩を設けて製作したるものとは、大に其趣を異にして、句毎に天真爛漫たる情を具へたるは、蓋し後世に見る能はざる處にして、これと和歌の本體なり。然るに、萬葉集時代に至りては、單に性情をのみ詠するに止まらず、一步思想を進めて、詠天、詠地、寄山、寄海、などの歌を詠出するに至り、古代純樸の風を脱し、漸く詞華を弄ぶに至れり。さればにや、和歌は冲天の勢を以て、京中京外の別なく隆盛を極めしかば、遂に文學史として、萬葉時代てふ表目を作らしむるに至りぬ。今之を、歌體、紀記中の歌、及び萬葉集、の三つに別ち、いさゝか詳記せん。

#### 第一節 上古の歌體

上古の歌體は一定せず。一句、三言、四言、六言、八言、九言、十言、十一言、の多きさへあり。句數又一定せず。要するに當時の和歌は、多く男女の愛情を主として、詠出したるものなれば、之をして巧妙ならしめむとせば、必ずや自然物に托して、譬喩し、或は自然物を借りて、之を語の修飾に用ゐざる可らず。さなくば、和歌は決して優艶なるものにあらず。之れ即ち自然なり。後世上古の歌なる二言三言を合し、或は四言三言を合して、一句と成し、以て三十一言に制限したるは、やゝ人工的に失し、大に歌たるの意にもとりしならん。

記紀に載せたる和歌は、必ずしも奈良時代にあらはれて、萬葉集なる和歌の、根底となりしや疑ひなし。そは萬葉集の歌に枕辭を用ゐ、或は句中に同父音を重用し、或は對句を使用せるなど、能く注目せば其痕跡數多残れり。尙委しく當時の歌體を研究せんと欲せば、日本紀歌解、稜威言別などによるべし。

萬葉集時代に至りては、漢詩の流行に伴ひ、其歌體にも影響して、風調内容共に變化し、句數もほゞ一定して、五七調となり、同時に其内容富麗となり、事蹟によりて歌を傳へし、記紀時代進化して、當時は歌によりて事蹟を傳ふるに至り、後世人爲的和歌の根源を創始せり。

#### 第二節 記紀の歌

前述の如く我邦は、上古より非常に韻文發達したれば、詠歌の如きも、神代より傳はれるもの少なからず。神武帝以降に至りては、甚だ盛にして、彼の帝の歌謠を作りて、士氣を鼓舞し給ひし以來、日本武尊、應神、仁德、繼體、雄略の諸帝を始めとして、伊須計依姬、神功皇后、磐之媛、八田皇女、黑媛、衣通姫、等の女流の歌、古事記、日本紀二書によりて傳はれり。

兩書載する處の歌二百三十四首、(古事記百七十七首、日本紀百二十七首)これが註解をなしたるものは

稜威の首別 十一冊

橘 守 部 著

日本紀歌の解 三冊

荒木田久老著

### 第三節 萬葉集

上古の尤も純粹なる韻文學として、見る可きものは萬葉集なり。此集の作者に就ては、古來其說一定せず、仙覺の萬葉抄に、孝謙天皇の御時、橘諸兄勅を奉じて撰ひしも、中途にして薨せしかば、其後大伴家持之を增訂して編成したるなりと云ふは、一般の説なり。釋契沖は、此集勅撰にあらず、大伴家持若年より、種々の歌集家集中より採萃し、天平寶字三年頃迄は分類したりしも、其後は分類などもせず、只書き置きたるまゝ、今日に傳はりしならんといへるは、信すべきなれども、やゝ時代の相違などもあれば、此説もいかゞあらん。要するに、諸兄公の集め置かれしを基として、家持卿受けつぎて撰集せられしものならん。此集勅撰にあらずる由は、體裁の不完全なると、同一の歌、重出せる

こと、卷末は家持の家集の如きとにても明かなり。尙委しくは契沖の代匠記、安藤爲章の年山打聞に論ぜり。

歌數は、種々説われ共、今本には四千五百首ばかりなり。これを雜歌、相聞、四季雜歌、挽歌、譬喻歌、四季、相聞、の六種二十卷となす。集中仁德天皇の後の歌四種、雄略帝の歌一首を除くの外は、舒明天皇より淳仁天皇に至る、百三十餘年間に輩出せる、五百六十餘人の金聲玉響を採集せり。

歌は皆漢字を借りて、國音を寫せしものにして、或は訓を取り、或は音を取り、音の内にも、正音あり、略音あり、訓の中にも、正訓、音訓、義訓あり、略訓、約訓、戲訓、借訓、等種々の體に使用し、まゝ漢字を玩弄物の如く、使用せる場合さへあるは、蓋し漢字の使用巧になりし故なるべし。之より進みて音標文字、即假名あらはるゝに至る。片假名平假名は要するに、萬葉假名に萌芽せしなり。

僅々百三十餘年の短期間に於て、五百六十餘人と云ふ大多數の作者を出せり。今之を分類せば、男女合せて、皇族百二十人。群臣三百五十七人。僧尼十三人。その他の女流七十一人。

其隆盛思ふべし。斯どころ奈良の都は、咲く花の匂ふが如く、盛りきほひて、今日九重に匂ひぬること、ことわりなれ。

而して集中、金聲玉音を奏し、芳名を今日に残せるもの多きが中に、此集を代表すべき女流は、大伴坂

上郎女、額田女王にして、これにつづくは、鏡女王、石川郎女、同女郎、田村大嬢、同少嬢、安曇外命婦、粟田郎子、大葉子、依羅娘、等白眉なり。

本集は源氏物語と相並て世に喧傳せられしものなれば、註釋書として表はれし者實に夥し。余一日此集に關係せる書を檢せしに、大凡四十六種、四百九十餘冊の多きに及べり。余の見ざる尙幾何ぞや。今研究者の爲め一二の註釋書を紹介せん。

萬葉代匠記 二十二冊

契沖 阿 闍 梨 著

本書は、水戸光圀公の請によりて書きしものにして、普く諸書を集めて校正し、尙精密に註釋を加へ、總釋二卷に於て、部類の事、文字に正義の二訓ある事、假名遣の事、枕詞の事など委しく論ぜり。近頃木村正辭先生の校訂を経て改刊せるは、活字洋本二十五冊にして甚だ便なり。

萬葉集略解 二十卷

橋 干 隆 著

萬葉註釋書として、今日尤も流布せるは本書なり。元來千蔭は眞淵翁の門弟なれば、其說萬葉考と大同小異なり。註釋は簡なれども、要を盡したり。近年洋本八冊に縮刊したれば大に便なり。

萬葉集古義 百四十一冊

鹿 持 澄 著

こはわらゆる萬葉註釋書を參考として、尤も詳細に註釋せるものにして、先づ完全なるものなり。こも又讀者の便を計り活字本卅一冊に縮刊せるものあり。

此他一部の事を書せし

萬葉集玉の小琴 一巻

本 居 宣 長 著

萬葉集佳調 二巻

長 瀬 眞 幸 著

萬葉集答問書 二巻

本 居 宣 長 著

萬葉集作者履歷 五巻

撰 者 未 詳

萬葉集書目提要 一冊

本 村 正 辭 著

などは必ず見るべきものなり。

### 第四章 作者略傳

#### 一、伊須計依姬

又の御名を媛蹈鞬五十鈴姫と云ふ。大物主命の女にして、神武帝の后なり。母を玉櫛媛と云ふ。庚申歳八月神武帝正妃を立てんとして廣く之を求め給ふ。大久米奏するに後の姿色を以てす。帝喜び迎へて妃となし給ふ。即位の元年正月、皇后となし、やがて御腹に、神八井耳命、神沼河命など生れ給ふ。綏靖天皇御即位に及び尊みて皇太后と申す。一説に神八井耳命、神沼河命の外に、彦八井耳命御座しませしとあれど、今姓氏録によりてこれを省きつ。

### 二、橘姫

日本武尊の寵姫にして、東夷征伐の時従ひて往く。相模を歴て將に上總に起かんとする折しも、海上波荒く御船甚だ危かりければ、橘姫曰く、是れ海神の祟なり。妾請ふこれに當らんとて、即ち自ら身を海に投じ給ふ。かくて風やみ波靜まりて安く岸に着くことを得たり。日本武尊上陸の後碓日峠に至り東望して姫を懐ひ歎じて、吾嬬はやとの給へり。是より東國を稱して、吾嬬國と云ふに至れり。

### 三、神功皇后

仲哀天皇の后なり。名は息長足姫と申奉る。開化帝五世の孫、息長足宿禰王の女にして、母を葛城高瀬姫と曰ふ。皇后は性質聰敏容貌美麗自ら神德犯すべからざるものあり。仲哀帝の崩するに及び親り師を率ゐて三韓を征し給ひしこと、普く世人の知る所なり。大和國十市郡磐余の稚櫻宮にましまして天下を治め給ふ。己丑の年崩御あり、狹城盾列池上陵に葬る。後神功皇后と謚す。

### 四、磐之姫

磐之姫は葛城襲津彦の女なり。仁徳天皇二年三月立て、皇后となす。詠歌に巧にして其詠、記紀萬葉集に散見せり。二十二年帝八田皇女を納れて妃となさんとし、歌を以て意を皇后に諭し給ふ。皇后歌

を詠じて之を沮み給ふ。三十年九月、后紀州熊野に幸し給ふを機とし、八田姫を宮中に召し給ふ。后之をきいて大に怒り、宮に還らずして、山背に入り給ふ。天皇屢々使を遣はし、還御を請ひ給ふと雖も聞かず。親しく山背に幸し、皇后を迎へ給ふと雖も、又參見せず。人をして奏せしめて曰く、陛下八田皇女を納れ皇后となす。我れ夫れに副ひて后たらんを欲せずと。帝已むことを得ず還行し給ふ。かくて皇后は幾くもなくして、筒城宮に薨す。

### ○和歌 (日本紀)

○陛下と贈答の歌に曰く

天皇皇后に乞て曰く

うま人の たつることだて うさゆづる たゆまづかむに ならへてもがも

皇后答て曰く

衣こそ 二重もよき さなごころを ならべん君は かしこきろかも

天皇又うたひて曰く

あしする 難波のさきの ならび濱 ならべんごころ そのこはありけめ

皇后答て曰く

夏蟲の ひむしの衣 二重きて かくみやたりは あによくもあらず



○山背河をのぼります時

つぎねふや	山代河を川上り	吾が上れば	河の邊に	生ひたてる
さしぶを	さしぶの樹	しが下に	生ひたてる	はひろ
ゆつまつばき	しが花の	照りいまし	しが葉の	ひろり坐すは
大君ろかも				

○那良の山口に到りまして、

つぎねふや	山代川を	みやのぼり	吾がのぼれば	あそによし
奈良をすぎ	をだて	やまを過ぎ	吾が見がほし	國は
葛城高宮	わぎへのあたり			

○短歌三首

○天皇を忍び奉る歌

斯くばかり 戀ひつゝあらば 高山の 岩根しまきて 死なましものを

○同

ありつゝも 君をば待たむ 打なびく 我が黒髪に 霜のゆくまてに

○同

秋の田の 穂の上にからふ 朝かすみ いづべの方に 我が戀やまむ

五、八田郎女

仁徳帝の妃にして、御母は宮主宅姫と申す。初め姫の同母兄、皇太子菟道稚郎子薨するに及びて、仁徳帝に托し宮に納れしむ。帝の二十二年これを納れて、太子の志をなさんと欲し、后磐之姫に計り給ひしも皇后憚りず。三十年皇后紀州に行啓あるに乗じ、納れて妃となす。三十五年磐之姫崩す。三十八年八田郎女を立て、皇后となす。帝皇后に子なきを以て侍臣物部大別連に詔して、御子代として八田部を定め給ふ。

六、推古天皇

天皇御名は額田部皇女と申し、炊屋姫天皇と稱す。欽明帝の皇女、御年十八にして敏達帝の皇后に立ち給ふ。三十四歳にして、天皇崩じ給ひければ、馬子等の勧めによりて、皇后踐祚し給ひ、大和高知なる、小墾田宮にて天下を治め給ふ。帝、麻戸皇子を立て、太子となし、萬機を攝せしむ。馬子大臣たり。天下を治め給ふ事三十六年、御年七十にて崩じ給ふ。越智の陵に葬る。

### 七、衣通姫

衣通郎女は、稚野毛二派皇子の女にして、允恭天皇の皇后、忍坂大中姫皇后の妹なり。名は弟姫といふ。姿容世に並びなく美はしく、光艶衣を徹するばかりなりければ、人名づけて衣通姫と云ひひける。允恭帝その美を聞き、使を遣して召し給ふ。時に母と共に、近江國坂田に在り。使の人七度までも來れど、いまだ參らざりしかば、更に舍人中臣烏賊津に勅して、強ひて携へ來らしめ給ふ。さてその容易に召に應ぜざりしは故あるなり。即ち衣通郎女は皇后の妹なりければ、詔は畏けれど、皇后の心を傷ましめんことを恐れてなり。

烏賊津勅を奉じて、衣通姫の家に至るや、天皇より必ず汝を迎へ來れとの仰せなり。若し然らざれば、我は歸りて罪を得ん。さあらんよりは、寧、茲にて死すべしとて、七日の間庭に伏して去らず。食を與ふれども食はず。以てひたすらに姫の意を得んことを望めるのみ。

烏賊津初め朝廷を出づるとき、ひろかに乾飯を裹み持ち行き、これによりて其命を繋ぎ居たりとか。こゝに於いて衣通姫、心に思ふやう、既に天皇の詔に従はざるは罪輕からず。なほ忠臣烏賊津を殺すは、わが罪を重ねるなりと、姫は遂に志を枉げて都に上ることとはなりぬ。

柳姿の若櫻、色に榮えある桃の花、衣袖を翻へす風の匂ひゆかしく、姫を携へて都に上る道すがら、春日の社に至り、櫛井のあたり旅の疲れを癒やさんとて、筵を設け、姫は烏賊津を勞ひもてなす心

いと懋なり。かくてこの日直に京師に入る。

烏賊津、姫をしてまづ藤原宮に居らしめ、此由を天皇に奏す。天皇大に喜び特に之を賞し給ふ。姫は皇后を憚りて敢て宮に入れ給はず。翌年二月、帝潛に藤原に御幸しこれを窺ひ給ふ時、姫はそれとは知らずして、天皇を慕ひけるに、偶々蜘蛛の軒端より下るを見て、歌ひて曰く、

吾がせこが來べき宵なりさゝかにの

くものふるまひかねてしるしも

天皇これを聞き、大に感賞し給ひて、

さゝらがた錦の紐を解きさけて

あまたは寝ずと唯一夜のみに

と歌ひ給ふ。

皇后之を聞き大に怨み給ひければ、姫は帝に向ひて、宮を離れ遠居せんことを請ふ。依て帝更に宮を河内國茅渚の里に作り、姫をしてこゝに移し居らしめ、屢遊獵に託して御幸し給ひしか。

紀州名草郡和歌浦に、玉津島明神あり、これ衣通姫を祀れるなり。世に國詩の神となして、尊崇す。傳へ云ふ、

夜や寒き衣や薄き片そぎの

行あひの隙に霜やふくらむ

の歌はこの神の詠なりと。

允恭帝七十八年正月十四日に崩御あり、其後衣通姫も身まかりしかど、年月日詳ならず。

八 大伴坂上郎女

なはとものかのうへのかみ

萬葉集中、女流作者にして傑出せるは、如何なる人なるか。曰はく、坂上郎女、額田女王の二人なり。けにこの二人こそ奈良朝時代に於ける女性詠吟家の代表者なりけれ。

坂上郎女は、大納言大伴安麿の二女にして、母の石川命婦と共に、大和の坂上の里に居たり。故に坂上郎女とは呼ばれたるなり。

始め穗積皇子に召されて甯を受けしが、皇子薨去の後、藤原麿にとつぎ給へり。麿は不幸にして短命なりしかば、更に大伴宿奈麿に嫁きて、田村大嬢、坂上大嬢の二人を生む。後宿奈麿とは離縁となりしかば、大伴駿河麿に通じけるが、後坂上少嬢を駿河麿に嫁して自らは絶念したりとか。

神龜五年、兄旅人に従ひて筑紫に下り、天平二年、京に歸る。生死年月は知る事能はざれども、察するに、天平十一年以後ならん。

○和歌 (萬葉集)

○春の歌

○柳歌二首

吾せこがみらむさほぢの青柳を手折てだにも見んよしもがな  
打あぐる佐保の河原の青柳は今にははるべとなりけるかも

○ 世の常に聞はくるしき呼子鳥聲なつかしき時にはなりぬ

○ 風まじり雪は降るとも實にならぬ我家の梅を花に散すな

○夏の歌

雀公鳥歌

何しかもこゝばく戀ふる郭公鳴聲きけばこひこそまさされ

○思筑紫大城山歌

今もかも大城の山に郭公鳴とよむらんわれなれども

○ 郭公いたくな鳴きそ一人居ていのねられぬに聞けば苦しむ

○ 原の野のしげみに咲ける姫ゆりのしらえね戀は苦しきものを

○ 五月の花橘を君がため玉にこそぬけあちまくをしみ

○ 秋の歌

○ 晩芽子歌

咲花もうつろふは憂しおくてなる長き心になほしかずけり

○ 跡見田庄作歌二首

よなばりの猪養の山に伏鹿の妻呼ぶ聲をきくがともしき

妹が目を跡見の丘邊の秋萩はこの月頃はちりこすなゆめ

○ 竹田庄作歌二首

こもりくの初瀬の山は色づきぬしぐれの雨は降にけらしも

志かどあらぬいほしろ小田を刈り亂り田ぶせに居れば都戀しも

○ 秋篠護贈大伴家持歌

我が蒔ける早田の穂だち造りたるかつらみ見つゝしねばせ我が背

○ 冬の歌

○ 雪歌

氷雪のこの頃つぎてかく降れば梅の初花散りか過ぎなん

松影の淺茅の上の白雪をけたずて置かんことはかまなき

○

盃に梅の花うけて思ふどち飲ての後は散りぬともよし

○ 雑歌

○ 宴親族之日吟歌

山守の有けるしらに其山にしめ結ひたてゝゆひのはぢしつ

○ 海路見濱貝作歌

吾せこに戀ふれば苦し暇あらば拾ひて行かん戀忘れ貝

○ 月歌

烏羽玉の夜霧の立ちておほしく照れる月夜の見れば悲しも

○ 詠元興寺里

古郷の飛鳥はあれど背によし奈良の明日香を見らくしよし

○相聞

○ 千鳥なく佐保の川戸の瀬を廣み打橋渡すながくと思へば

○ 黒髪に白髪まじり老ゆるまでかゝる戀には未だあはなくに

○ 山管の實ならぬ事を我によせ云はれし君は誰とかぬらん

○ 出でいなん時しはあらんを殊更に妻戀しつゝ立ていぬべしや

○ 心には忘るゝひまなく思へども人の事こそ繁き君にあれ

○ 久方の天の露霜置にけり家なる人も待ち戀ひぬらむ

○長歌

○祭神歌

久堅の天の原より あれ來たる神の命 奥山の柳が枝に しらがつく木綿とりつけて いはひべを祝  
ひほりすゑ 竹玉をしいにぬきたり しゝじもの膝折伏せ 手弱女のおすひとかけ かくだにも我

は戀ひなむ 君にあはじかも

反歌

木綿たゝみ手に取持てかくだにも吾は戀なん君に逢はじかも

○怨恨歌

押照る難波の管の ぬもごろに君がきこして 年深く長くし云へば まそ鏡とぎし心を ゆるしてし  
其日の君は 涙のむた靡く玉藻の かにかくに心は持たず 大船のたのめる時に 千早振神やさけゝ  
ん 空蟬の人かさふらん 通はせる君も來まきさず 玉章の使も見えず なりぬればいたもすべなみ  
烏羽玉の夜はすがらに 赤らひく 日も暮るゝまで 嘆けどもしるしをなみ 思へどもたづきをしら  
に 手弱女と云はくもしるく た童の音のみ泣きつゝ たもとほり君が使を 待ちやかねてん

反歌

初めより長く云ひつゝ頼めずばかゝる思ひにあはまし物か

九、額田王

天智天皇の御代にて、女流中、最も歌道に名高かりしは、鏡女王の妹額田王なりき。  
王は、容貌絶美にして、詞藻優艶、當時、鏡皇女、大伴坂上郎女等と互に歌才を競へり。姉鏡女王も

亦歌をよくせしまし、後世の人、兩女を同人とするもあれど、こは全く誤なり。

そは萬葉集の二卷、或は四卷を見れば姉妹共に天智帝に仕へしことは詳に知らる。また集中に、額田王は、天武帝とも親めりとあり。思ふに、品行の上の缺點は免れざるもの如し。されど文學上に於て、價値あるものを、茲に掲げずして、止むべけんや。その歌は、いづれもなく、いとめでたし。

○和歌 (万葉集)

○思近江天皇歌

君待と吾が戀居れば我宿のすだれ動かし秋の風ふく

○

秋の野のみ草刈りふき宿れりし菟道の都のかりほしも見ゆ

○

にきたづに船のりせんと月待てば汐もかなひぬ今はこぎこな

○天皇遊瀨浦生野時歌

あかねさす紫野ゆきしめ野行き野守は見ずや君が袖ふる

○弓削皇子に答ふる歌

古に戀ふらむ鳥は郭公けだしやなきしわが戀ふるごと

○長歌

○天皇詔内大臣藤原朝臣鏡憐春山万花之艶秋山千葉之彩時以歌判之歌

冬ごもり春去來れば 鳴かざりし鳥も來なきぬ 咲かざりし花も咲けれど 山をしみ入りても取らず  
草深み手打りても見ず 秋山の木の葉を見ては 紅葉をば取りてぞ忍ぶ 青きをば置て予なげく  
そこし恨めし秋山われは

○從山科御陵退散之時作歌

やすみし、我が大君 かしこきや御陵つかふる 山科の鏡の山に 夜はも夜のあくるまで 晝はも日  
のくるまて ねのみを 泣きつゝありてや 百敷の大宮人は 行き別れなん

○下近江國時作歌

うま酒三輪の山 青によし奈良の山の 山の間にかくるまで 道のくまいつもるまでに つばらに  
も見つゝ行かむと しばくも見さけむ山を 心なく雲のかくさふべしや

十、鏡王女

鏡王女は、奈良朝時代に於ける、女性歌人の一人にして、その歌多く萬葉集に載せたり。書紀などによれば、鏡王の女なりとあれども、これは誤りにして、その實は大和國平群郡大昌嶺の近

傍に、住み給ひけるが、後天武帝に召されて、十市皇女を生み奉れり。

ある時天智帝の、齊明天皇に従ひて伊豫の國に御幸したまふ事あり。この時王女も従ひ給ひて、ひそかに天智天皇に通じ給ひしが、帝の崩じ給ふに及びて、再び天武帝と配し給ふ。

白鳳十二年、鏡王女病み給ふ。七月天皇親しくその家に御幸ありて、病を助ひ給ひしが、後數日ならずして遂に浮世の嵐に誘はれ、はかなくも世を去りましぬ。

○和歌

○秋相聞

風をだに戀ふるはともし風をだにこんどしまさばいかい嘆かん

○奉天皇歌

秋山の木の下がくり行水の吾こそまさめ御思ひよりは

○

神なびのいはせの森の呼子鳥いたくな鳴そ我戀ひまさる

○贈内大臣歌

玉匣たまぐしおほふをやすみあけていなば君が名はあれど我が名しをしも



十一、陸奥の采女

葛城王、勅使となりて陸奥の國に下り給へる時、國司の所爲甚だ疎密なりとて、腹立ちし給ひ、その怒、顔色にあらはれて、國司の響應申し上ぐるをも、あへてとりあひ給はねば、興さめて、困じ果てたる折節、此所に、采女とて、いとみやびにやさしき女ありけるが、盃を捧げ侍りて、

淺香山かけさへみゆる山の井の

あさき心はわがおもはなくに

と詠み出でける。

國司、おろそかに思ひまゐらす事はあらねど、いかに御機嫌に違ひ侍らんといへる心を申しければ、王の御氣色ために柔きて、酒宴したのしみ給へりと、萬葉に見ゆ。これを以て和歌の才に富めることを推知すべきなり。この淺香山の歌、かゝる徳あるゆゑに、かの王仁が、仁徳天皇を歌ひ奉りたり、と傳ふる。

難波津に咲くやこの花冬ごもり

今を春へと咲くやこの花

とよめる歌と共に、難波津、淺香山とて、歌の父母として、昔は手習ふ人の始にもしたりきとぞ。



十一、笠女郎かさのやしろ

笠女郎は、筑紫觀音寺の別當、沙彌滿誓が女なり。筑紫に於て、大伴家持と通じ遂に妾となる。家持京にかへるに及び後を慕ひて上る。和歌に巧にして、萬葉集中に家持と贈答の歌多くのせたり。天平十二年没す。

十二、栗田娘子あしたのひらつこ

性質和歌を好みて、深くその蘊奥を究む。寶字八年、外從五位下を授けられ、寶龜六年、從五位下に叙せらる。詠歌は萬葉集にあるのみならず、その他諸書にも散見せり。

十四、縣犬養娘子あかたぬかひのひらつこ

葛城王の母なり。和歌をよくせしを以て、世にその名をしられたるなり。養老元年、從四位上を授けられ、三年從三位に累進し、五年正三位に叙せられ、食封資人を賜はる。天平五年薨す。從一位を贈られたり。性質聰敏にして温雅なり。詞優しくしていやしからず。詠歌は萬葉集第八卷に載せられたり。

十五、丹生女王にのやまの女王

女王の御傳は詳かならず。續日本紀によれば、天平の十一年從四位上を授けられ、天平勝寶二年正四位上を授けられし事見ゆるのみ。一書に、雨の神岡象女神くさねのめがみなり。大和國吉野郡丹生川上に祀る二十二社の内にして、白鳳四年に鎮座し給ふとす。

十六、石川女郎いしかわのやしろ

遊女なり。字名を大名見といふ。容貌麗麗にして、和歌の才に富めるを以て、その名大に世に知られたり。久米禪師と親しみ、後大津皇子に召されて、内命婦となり、甚だしく寵愛を蒙る。詠歌は多く萬葉集中に入れり。

第五章 女流作例

一、古事記中の歌

さる河よ 雲立ちわたり 畝火山 木の葉さやぎぬ 風吹かむとす

伊須氣余理比賣

同



嵐火山 ひるは雲と居 夕されば 風吹かむとぞ 木の葉さやげる

橘 比 賣

○ さねざし 相模の小野に もゆる火の 火中に立ちて とひし君はも

美 夜 受 比 賣

○ 高光る 日の御子 やすみし、吾が大君 新玉の 年が来ふれば 新玉の 月はきへ行く うべな

く 君待ちがたに 吾がけせる おすひの裾に 月たしなむよ

倭建命の 后御子等

○ 命のかくりませし時

○ 白智鳥を追ひて

なづきの 田の稻がらに いながらに はひもとほろふ ところつら

○ 同

浅茅ぬ原 こしなづむ 空は行かず 足よゆくな

○ 同

海が行けば 腰なづむ 大河原の 植草 海がは いとよふ

○ 酒

息 長 帯 日 賣

此御酒は 我が御酒ならず くしの神 常世にいます いは立たす 少名御神の 神はぎ はぎくる  
ほし どよほぎ ほぎもどほし まつりこし 御酒ぞ あさずをせさし

黒 日 賣

○ 大和べに 西吹きあげて 雲ばなれ そきをりとも 我れ忘れめや

○ 同

大和べに 往くはたが夫 こもりづの したよはへつゝ 往くはたが夫

八 田 若 郎 女

○ 仁徳天皇に答へ奉る歌

八田の ひともど菅は ひどり居りとも 大君し よしときこさば ひどりをりとも

女 烏 王

○ 隼別王の來ませる時

○ 雄略天皇の御歌に答へ奉る歌

ひばりは 天にかける 高ゆくや はやぶさわけ さくぎとらさね

赤 猪 子

○ 同

御室に つくや玉垣 築きあまし たにかもよらむ 神の宮人

同

○ 日下えの 入江のはちす 花ばちす みのさかり人 ともしきろかも

三 重 の 采 女

まき向の 日代の宮は 朝日の ひでる宮 夕日の ひがける宮 たけの根の 根だる宮 木の根の  
 根ばふ宮 やほによし いきづきの宮 まきさく ひの御門 新嘗やに 生ひだてる 百足る 槻  
 が枝は ほづねは 天をおへり 中つ枝は 吾妻をおへり 下つ枝は 部をねへり ほづ枝の 枝の  
 うら葉は 中つ枝に 落ち觸らばへ 中つ枝の 枝のうら葉は 下つ枝に 落ちふらばへ しづ枝の  
 枝のうら葉は あり衣の 三重の子が さくがせる みづ玉うきに うきしあぶら 落ちなづさひ  
 みなこころ ころに こしも あやにかしこし 高光る 日の御子 とのかたりごとも こそば  
 ○ 若 日 下 王

倭の この高市に 小高る いちのつかさ 新嘗屋に 生ひだてる 葉廣 ゆつまつばき そが葉の  
 ひろりいまし 其花の てりいます 高光る 日の御子に とよみき たてまつらせ ことのかた  
 りごとも こそば

袁 杼 姫

やすみし、我か大君の 朝戸には いより立たし 夕戸には いよりだす わきづきが 下の枝  
 にもが 吾夫を

二、日本紀中の歌

口持 臣の 妹

○ 山背の 筒城の宮に もの申す 我兄を見れば 涙ぐましも

圓 大臣の 妻

○ ちみの子は たへのはかまを なへをし 庭にたしして あよひなだすも

影 比 賣

○ 背によし ならのはさまに しじもの みづくべこもり みなそいぐ 鮪の稚子を あさりつな猪  
 の子

同

○ 鮪の臣の殺されたる時に追行きて

石の上 布留をすぎて ともまくら 高橋すぎ 物さはに 大宅すぎ 春日の 春日をすぎ つまご  
 もる 小佐保をすぎ たまけには 飯さへ盛り 玉もひには 水さへ盛り 泣きそぼち行くも 影比  
 賣あはれ

伊 企 灘 妻 大 葉 子

○ 唐國の きのへに立ちて 大葉子は ひれふらすも やまどへむきて

繼 體 帝 の 妃

○ ともりくの 初瀬の河ゆ 流れ来る 竹のいくみ竹と竹 もとへをば 琴につくり 未へをば 笛

につくり 吹きなす みもろが上に のぼり立ち 我が見せば つねははら いはれの池の みなし  
たふ魚も 上にでしなげく やすみし、 わが大君の おはせる さくらのみねびの むすびたれ  
たれやしひども 上にでしなげく

○ 久方ゆ ふえ吹きのぼる あふみのや けなのわく子は ふえ吹きのぼる 毛野臣妻

○ まろがよ 蘇我の子らは うまならば 日向の駒 太刀ならば くれのまさひ うべしかも 蘇我の 推古天皇

子等を 大君の つかはすらしき

○ 山こえて 海わたるども 面白き 今城の内は 忘れゆまじに 齊明天皇

水門の 沙のくんだり 海くんだり うしろもくれに 置きてか行かむ  
うつくしき あが若き子を 置きてか行かむ

三、萬葉集中の歌

○ 春の部 雑歌、相聞、

駿河采女

沫雪かけだれに降るとみる迄にながらへ散は何の花ぞも

○ 山吹の咲たる野邊のつぼすみれ此春の雨に盛りなりけり 高田女王

贈大伴家持歌

笠女

水鳥の鴨の羽色の春の山たぼつかなくも思ほゆるかな

○ 水鳥の鴨の羽色の春の山たぼつかなくも思ほゆるかな 紀女

やみならばうへも来まさじ梅の花咲ける月夜にいでまさじとや

○ 厚見王報贈歌

久米女

世の中も常にしめらねば宿にある櫻の花のうつる頃かも

○ 贈大伴家持歌

紀女

世は咲き夜はこひぬるぬむの花我のみ見んやわけさへに見よ

○ 夏の部 雑歌、相聞、

○ 郭公いたくな鳴きそ汝が聲を五月の玉にあへぬくまで 藤原夫人

○橋歌一首

君が家の花橘はなりにけり花なる時にあはましものを

遊行女婦

○贈大伴家持歌

郭公鳴きしすなはち君が家に往けど追ひしはいたりけむかも

大神女

○興妹坂上大嬢歌

古里のならしの岡の郭公言告やりしいかに告げきや

田村大嬢

○秋の部 雜歌、相聞、

事繁き里に住まざばけさ鳴きし雁にたぐひていなましものを

但馬皇女

○雁の歌

誰きつこゆ鳴渡る雁が音の妻よぶ聲のゆくをしらさず

巫部麻蘇娘

○

秋づけは尾花が上に置露の消ぬべくも吾は思ほゆるかな

日置長枝娘

○

久米女王

もみち葉を散らす時雨にぬれて来て君が紅葉をかざしつるかも

○

珍らしと我思ふ君は秋山の初もみち葉に似てころありけれ

長忌寸娘

○贈大伴卿歌

たかまどの秋野の上の撫子の花うらわかみ人のかざせしなでしこの花

丹生女王

○

足引の山下どよみ鳴く鹿のこどもしかもわが心づま

笠縫女王

○

神さぶといなにはあらず秋草の結びし紐をとかばかなしも

石川賀係女郎

○

秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君にあへることよひか

賀茂女王

○贈大伴宿禰家持歌

朝毎に吾見る宿のなでしこの花にも君はありこそぬかも

笠女

同

秋萩に置たる露の風吹きて落つる涙はどいめかねつも

山口女王

○ 我宿の萩の花咲けり見に来ませ今二日ばかりあらば散りなむ

○ 與坂上大嬢

吾宿の秋の萩咲くゆふかけに今も見てしが妹がすがたを

○ 冬の部 雜歌、相聞、

○ 雪の歌

大口の眞神の原に降る雪はいたくな降そ家もあらなくに

○ 梅歌

師走には沫雪ふると知らぬかも梅の花咲くふくらみらずして

○ 依梅發思歌

今のごと心を常に思へらばまつ咲花のつちに落ちめや

○ 奉天皇御歌

我がせこと二人見ませばいくばくかこの降雪の嬉しからまし

巫部 麻蕪娘子

田村 大嬢

舍人 娘子

紀少 鹿女郎

縣犬 養郎女

光明 皇后

池田 廣津娘子

まきの上に降り置ける雪のしくくも思ほゆるかも小夜とへ我がせ

○ 久方のつく夜を清み梅の花心ひらけて吾がもへる君

○ 與妹坂上大嬢歌

沫雪のけぬべきものを今までにながらへぬるは妹に逢んとぞ

○ 挽歌

○ 河内王葬 豊前國鏡山之時歌三首

大君のむつ魂あへや豊國の鏡の山を宮とさだむる

豊國の鏡の山の岩戸たてかくりにけらし待てど来ませず

岩戸わる手力もがなたよわき女にしあれば術のしらなくに

○ 天皇崩御之時御作歌

人はよし思ひやむとも玉かつら影に見えつゝ忘らえぬかも

○ 小浪の大山守は誰が爲に山にしめ結ふ君もまさなくに

紀少 鹿女郎

田村 大嬢

手持 女王

倭 太后

石川 夫人

○大津皇子薨之後從伊勢齋宮上京之時

神風の伊勢の國にもあらしをなにしか來けん君もあらなくに  
見まくほり我する君もあらなくになにしか來けん馬疲るゝに

大來皇女

○移奉大津皇子屍於葛城二上山之時

磯の上に生るあしびを手折らめど見すべき君が有と云はなくに  
空そみの人なる我や明日よりは二上の山をいもせど我が見ん

大來皇女

○柿本人麿死時作歌二首

今日くど吾待つ君は石河の貝にまじりて有と云はずやも  
たいに逢はれ逢ひもかねてむ石川に雲立渡れ見つゝ忍ばん

依羅娘子

○石田王卒之時作歌

石の上ふるの山なる杉むらの思ひすぐべき君ならなくに

丹生女王

○長屋王賜死之後

天皇の命かしくみちほあらぎの時にはあらねど雲隠ります

倉橋部女王

○雜歌

○越勢能山時

これやこの倭にしては我戀ふる木路にありとよ名に負ふ勢能山

阿閉皇女

○

吾せこは何處行くらんちきつもの名張の山を今日かこゆらん

當麻真人麿妻

○從親作歌

丈夫がさつ矢たばさみ立向ひ射るまどかたは見るにさやけし

舍人娘

○

ながらふるつま吹く風の寒き夜に我がせの君は獨りかぬらむ

與謝女王

○

草枕旅行く君としらませば岸のはにふたにほはさましを

清江娘子

○奉天皇歌

吾大君物な思ほし皇神のつぎて賜へる吾ならなくに

御名所皇女

○屋部坂歌

人見ずば我袖もちてかくさんを焼けつゝかわらんきずて來にけり

阿倍女郎

○

石川少郎

志かの海人はめ刈り鹽やき暇なみくしげの小櫛取りも見なくに

○贈行旅歌

家もふとさかしらなせそ風まもりよくしていませ荒き其路

○

輕の池浦も行めぐる鴨すらに玉藻の上にひとり寐なくに

○月歌

雲がくり行くへをなみと我こふる月をや君が見まくほりする

○智努女王卒後悲傷歌

夕霧に千鳥の鳴きしさをばわらしやしてむみる由をなみ

○

朝宵にぬのみしなけばやき太刀のごころもあれば思兼つも

かしときや天の帝をかけつればぬのみしなかつ朝宵にして

○

橘の下照るにはに殿たてゝさかみづきいます吾大君かも

○

筑紫娘子

紀皇女

豊前娘子

圓方女王

藤原夫人

河内女王

粟田女王

月待ちて家には行かむ我がさせる赤ら橋かげに見えつゝ

○相聞

○大伴宿禰報贈歌

玉葛花のみ咲きてならざるはたが戀ならめわは戀ひもふを

○御製奉和歌

吾岡のおがみに云ひて降せたる雪の碎けしここにちりけむ

○大津皇子奉和歌

あを待つと君がぬれけむ足引の山の車にならましものを

○在高市皇子宮時思穂積皇子歌

秋の田の穂向のよれるかたよりに君によりなくこちたかりとも

○

歎きつゝ丈夫の戀亂れこそ我が元結のひちてぬれけれ

○贈大伴田主歌

みやび男と我は開るを宿かさず我を歸せりおぞのみやび男

巨勢郎女

藤原夫人

石川郎女

但馬皇女

舍人娘子

石川女郎

○與人磨相別歌

なもひそと君は云へども逢はん時いつぞ知りてか我がこひをらん

依羅娘子

君が家にわれ住坂の家路をも我は忘れじいのちしなずば

人磨の妻

今更に何をか思はん打靡き心は君によりにしものを

安倍女郎

我せこは物な思ひる事しあれば火にも水にも我なけなくに

駿河采女

敷妙の枕ゆくゝる涙にぞ浮寐をしけるこひのしげきに

安倍女郎

我せこがけせる衣の針目ねちず入にけらしも我が心さへ

石川郎女

春日野の山邊の道をよそりなく通ひし君が見えぬころかも

大伴女郎

雨ざはり常する君は久方のきのふの雨にこりにけむかも

○天皇奉答歌

海上女王

梓弓つま引よとの遠音にも君が御幸をきくはしよしも

○贈今城王歌二首

高田女王

事清くいともな云ひそ一日だに君いしなくば痛ききずぞも

此世には人事しげし來ん世にも逢ん我がせこ今ならずとも

丹生女王

○贈太宰帥大伴卿歌

天雲のそきへの極みとほけども心し行けば戀ふるもの哉

賀茂女王

○贈大伴宿禰三依歌

筑紫船未だも來ねばあらかじめ荒ぶる君を見るが悲しさ

同

大伴のみつとけ云はむ茜さし照れる月夜にたゞにあへりとも

笠女郎

○贈大伴宿禰家持歌三首

白鳥の鳥羽山松のまちつゝぞ我が戀ひ渡る此月ごろを

闇き夜になくなる鶴のよそのみに聞きつゝかあらん逢とはなしに

空蟬の入目をしげみ岩橋のま近き君にこひわたるかも



○贈大伴宿禰二首

劔太刀名の惜けくも我はなし君に逢はずて年の経ぬれば  
芦邊より滿來る沙のいやましに思へか君が忘れかねつる

山口女王

○贈大伴宿禰二首

小夜中に友呼ぶ千鳥物もふとわび居る時になきつゝもどな

大神女郎

○獻天皇歌

君により言のしげきを古郷のあすかの河にみそぎしに行

八代王

○怨恨歌

世中の女にしあらば吾渡るあなせの河をわたりかねめや  
白妙の袖別るべき日を近み心にむせびぬのみしな加ゆ

紀女郎

○

戀草を力車に七くるま積みて戀ふらく我がこゝろから

廣河女王

戀は今あらじと我は思ひしを何處の戀ぞつかみかゝれる

○贈大伴宿禰二首

はつゝに人を相見ていかならん何れの日にか又よそに見ん

河内百枝娘子

烏羽玉の其夜の月夜今日迄に我れは忘れずまなくし思へば

○

たく細の永き命をほしけくば絶えずて人を見まほしみこそ

巫部麻蘇娘子

○贈大伴宿禰二首

思ひやるすべの知らねば片もひの底にぞ我はこひなりにける

粟田娘子

○大宅女歌

夕開は道たづ／＼し月待ちていませ我がせこ其まにも見む

豊前國娘子

○

み空行月の光りにたゞ一目あひ見し人の夢にし見ゆる

安都扉娘子

○

鴨鳥の遊ぶ此池に木の葉落ちて浮べることる吾がもはななくに

丹波大娘子

垣秘なす人言きゝて吾せこが心たゆたひあはぬこの頃

○

枕太刀腰に取佩きまかなしきせろがまきこんつくのしらなく

上丁那珂郡檜前舍人石前之妻

○ 棕椅部刀自賣

草枕旅行くせながまるいせば家なる我も紐どかずねん

としまほり 豊島郡上丁棕椅部荒蟲之妻宇運部黒女

○ 我かどのかた山膝まことなれ我手ふれなつちに落ちむかも

○ 棕椅部弟女

○ 草枕旅のまる寐のひもたえはわがてとつけろこれのはるしも

○ 都筑郡上丁服部於由妻昔女

○ 我せなを筑紫へやりてうつくしみ帯はどかなあやにかもねも

○ 物部刀自賣

○ 色深くせなが衣は染めましをみさかたはらばまさやかに見む

○長歌

○ 倭太 后

いさなとり 淡海のうみを 漕ぎ来る船 へつきて 漕ぎ来る船 おきつかい いたくなはねそへ

つかい いたくなはねそ 若草の つまの 思ふ鳥たつ

○石田王卒之時作歌

丹生 女王

なゆ竹の とをよるみこ さにづらふ 我が大君は こもりくの 初瀬の山に かむさびに 齋きい  
ますと 玉梓の 人ぞ云ひつる をよづれか 吾がきつる まが言か 我が聞つるも あめつちに  
悔しきとの 世のなかの 悔しき事は 天々もの そくへの極み 天地の 至れるまでに つるつ  
きも つかずも行て 夕けどひ 石うらもちて わがやどに 御室をたてし まくらへに 齋ひへを  
すゑ たかだまを 間なく貫たれ 木綿襦 かひなに掛て あめなる さいらの小野の なふ管  
手に取り持て ひさかたの 天のかはらに いてたちて みそぎてましを たかやまの いはほの上  
に いませつるかも

反歌

をよづれのまが言どかも高山の巖の上に君がこやせる

## 第二期

(自紀元一千四百四十五年  
至紀元一千八百四十九年)

# 王朝時代の下

## 總論

平安文學とは、今を去ること千餘年前、桓武帝の始めて都を平安に移されしより、鎌倉幕府創立に至るまで、凡そ四百年間の文學を云ふ。

當時代に至りては、文字の使用自由になり、加ふるに平假名の發明さへありければ、人々大に之に便を得、萬葉假名の煩をすて、此假名によりて、始めて真正の散文を見るに至れり。後世國文學の至寶なりとて人々の賞讃する、源氏物語、枕草子は此時代に表はれたり。實に當時散文の發達は其頂點に達したりといふべし。

元來當時代の文學は、藤原氏と其盛衰を共にしたれば、文徳以前、後三條以後は、藤原氏の勢微々たりしかば、文學また見るべきものなし。當時文學として誇稱すべきは、彼の望月のかけたる事もなき、藤原氏の全盛時代、即ち道長關白の前後にして、僅々百年未滿の間なりしなり。物語、紀行、日記など、特種の點を有してあらはれしも此時代なり。才媛文壇に雄飛せしも此時代なり。實に當時は

文華爛熳たるの時代なりき。斯く競ひ咲きたる千紫萬紅の裡、殊に異彩を放ちたるものあり。曰く紫式部、清少納言なり。而して紫女は艶麗無双と稱せられ、清女は清楚絶倫と唱へらる。彼の實典たる源氏物語、枕草子は此二女の手によりてなれり。當時の文壇は實に女流の支配する所なりしなり。試に當時の散文界より女流を削除せんか。其形勢實に寂莫たるものならん。

更に立かへりて韻文界の情況を窺はんか。當時は外交頻繁を極めし爲、人々古來純樸なる和歌をすて、外來の唐詩を吟誦するに至り、嵯峨淳和兩帝の朝には文華秀麗集、經國集などの詩選さへありしかば、朝官は更なり、地方官吏に至るまで、盛に唐詩を吟誦せり。之に反して和歌は大に衰へ、一人として萬葉集の遺響をつぐものなかりしも、貞觀年中に至り、再び和歌の開運に接し、延喜中古今集の選ありてよりは、漸次隆盛を來したり。次で一條帝前後に至りては、斯道の名匠も多く現はれ一時大に勃興したり。されど奈良朝の面かげは見るよしなく、人々古風を嫌ひて、言辭も風調も大に改まり、あまつさへ、堀河帝前後に至りては、歌合など大に流行せし結果、題詠のみ盛にして、優に平安朝和歌なるものを構成せり。

斯く文學は、散文韻文共に一時隆盛を極めたれども、其極人心の優柔懦弱をかゝす原因となり、遂に武門政治の源を開くに至れり。

今之を、散文學韻文學の二種に大別して、聊か詳述する所あらん。

## 第一章 散文學

平假名製作以來、自由に己れのお思想感情を發表するの便を得たりしかば、公卿閨媛など、之を一の消閑的の具に利用して、世々の榮華凋落を記し、又一の趣向を構へて社會の人情を寫し、或は日々の出來事より神社佛閣へ物せし等の事までも、態と艶麗なる詞語を以て記載するに至り、其嚆矢として、竹取物語、伊勢物語、表はれたり。然れども未だ隆盛の域に至らずして、漢學の爲に壓倒せられんとせしを、紀貫之出で、土佐日記、古今集序などを書してよりは、一時衰頹せし散文復勃興し、源氏物語を初として、狹衣、榮花、などの物語あらはれ、日記紀行には、土佐日記に次で蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記出で、次で更科日記、讃岐典侍日記などあらはれたり。かくの如く散文の發達頂點に達し、文人は互に美麗なる詞花を咲かしめんとをつとめたるなど、我國文學史上尤も著明なる時代なり。今之を物語及び日記紀行、草子、に區分して其梗概を叙述せん。

### 第一節 物語

物語には作者の想像よりなりし事、些細の事實を敷衍したる事、事實を美文に書したる事の三種ある由は、先證既に之を云へり。げに此三種に外ならず。當時の物語は、昔公卿の手に弄ばれしものなれば、書する處の材料、亦公卿間の艶話を寫したるものなり。故に之に依て、當時一般の社會觀こそ能

はされ、京師に於て、詩歌管絃を弄し、表面駢奢泰平を粉飾せる大宮人の、其裏面に於て、果して如何なる行爲ありしかといふに至りては、是非是等の物語日記より外に知る事能はざるなり。

物語の中にて尤も古きは、竹取、伊勢物語なるべし。之に次ぎて住吉物語、宇津保物語あらはれ、次で濱松中納言物語、落窪物語あらはれたり。以上は何れも公卿間の艶話ならざるはなし。中には女流の手になれるものありしならんも、作者の傳はらざるこそ遺憾なれ。

此他短篇小説の祖たる堤中納言物語(作者不詳一説曰藤原兼輔)出で、源隆國又傳説を集めて今昔物語、宇治拾遺物語の著あり。其他朝倉物語、交野少將物語、など種々あれども今に傳はるもの少なければ省きて、散文界の寶典たる源氏物語に就て聊か記さん。

源氏物語五十四帖 本書は我が文學界の寶典として、千餘年後の今日迄喧傳せらるゝ處にして、紫式部が村上帝の皇女、選子内親王の爲に、石山寺に閉居して、此物語五十四帖を書したり、とは古來よりの傳説にして人の普く知る處なり。されども石山寺云々の事は誤傳なり。思ふに紫女七輪に、河海抄の説を引きて、寛弘の初めに書きてとあれば、いかに長保の末、寛弘の初め、式部やもめ住にて、里亭に侍りけるつれづれに作りたるかどあるは正説ならん。又其年齢の程も同書に諸書を考證して、二十七乃至三十歳頃なるべし、とあり。此説信に近からん。

源語の文章は、今更ら余が語を俟たずして讀者皆知らん。その艶麗緻密の筆に萬象を描寫して殘すな

く、又高遠微妙の思想を寫して、明快なる、實に我邦著作の上乗寶典たる事言を俟たず。一部五十四帖より成る。其目次は、

桐	壺	簾	木	空	蟬	夕	顔	若	紫	末
紅葉	賀	花	宴	葵	生	賢	木	花	散	摘
明	石	滌	標	蓬	女	關	屋	繪	里	須
薄	雲	朝	顔	乙	生	玉	屋	初	合	松
螢	、	常	夏	箒	火	野	分	御	子	胡
楨	柱	梅	枝	藤	葉	若	菜	柏	幸	藤
鈴	蟲	夕	霧	御	法	野	分	御	木	藤
紅	梅	竹	河	橋	法	若	菜	御	木	藤
宿	木	東	屋	浮	舟	若	菜	御	木	藤
						野	分	御	木	藤
						玉	屋	初	子	胡
						關	屋	繪	合	松
						賢	木	花	里	須
						夕	顔	若	紫	末
						蟬	生	花	散	摘
						葵	蓬	乙	箒	葉
						宴	標	朝	夏	枝
						木	雲	常	梅	柱
						簾	滌	朝	梅	柱
						壺	石	朝	梅	柱
						桐	雲	朝	梅	柱

此物語は古來より、我國文學の至寶として貴ばれしにより、之が註釋書又評論を下したるもの大凡六十三四種の多きが中より、參考となるべき書二三を記せば、  
文學全書本活字洋本 五册  
こは萩野由之、小中村義象、落合直文の三氏校正頭註して出版せられしものにして、文學全書の八編

より十二編迄の五編に納めたり。

河海抄 二十卷

四辻 善成著

源語一部の註にして、第一卷は物語の起り、時代の事、題名の事、式部の傳など書し、以下桐壺より順次註せり。

花鳥餘情 二十卷

一條 兼其著

河海抄の誤れる處を正し漏れたるを補ひ加へたるものなり。

源氏湖月抄 六十卷

北村 季吟著

源氏註釋として尤も廣く行はるゝは本書なり。本書は細流抄、孟津抄、の説を本とし、河海抄、花鳥餘情の要を取り、弄花抄、明星抄の説を交へ、且つ自説をも加へて明瞭に解せり。源氏一部の註釋としては完全なるものなり。

同 活字洋本 八册

小田 清雄 校正増補

同 同

猪熊 夏樹 校正増補

玉の小櫛 九卷

本居 宣長著

本書は種々の異本と校正し、湖月抄の誤を正したれば、湖月抄と共に見るべきものなり。

源氏評釋 十三卷

萩原 廣道著

これは未完の書なれども、其評論解釋の周密なる、本書の右に出るものなし。

本書の解釋は八冊、花宴迄にして、餘の五冊、物論、餘釋語釋を記せり。

紫女七論 一冊

安藤 爲 章 著

本書は源語の註ならざるも、紫女の研究上缺く可らざるものなり。

狹衣物語 八卷 本書は源氏物語なりて、四十餘年後、其女、大貳三位の書せしものにして、其體裁

は源氏物語にならひ、設くるに狹衣大將を以てして、其主人公となせしなど、全く源氏と同じけれども、其文章源氏に比較せば、甚だ幼稚なるものにして、其及ばざる處遠し。

僻案抄には、本書を以て大貳三位の作にあらざる由記せども、余は從來の説に従ひ、三位の著として暫く此處に記せり。本書の参考ともなるべきもの殆どなし。今傳はるは左の二種とす。

狹衣系圖 一卷

西三條 實 隆 著

これは源氏物語の系圖にならひて作りしものなるべし。今は本書に附刻せり。

下紐 四卷

作者 不 詳

これは狹衣物語の抄なり。

### 第二節 日記紀行及び草子

物語に次で見るときは、日記及び紀行の文なり。日記の尤も古きは散文學埋伏時代にあらはれたる、

土佐日記を以て始めとす。本書は貫之が土佐の國府より歸る道すがらの事を記せるものにして、名は日記と云へど、全く紀行なり。元來日記と紀行とは、其別辨は難きふし多ければ、今之を混合して記さん。扱て土佐日記に次であらはれしは、蜻蛉日記を始として、和泉式部日記、紫式部日記次で、いはぬし、更科日記、讃岐典侍日記等續々あらはれたり。而して土佐日記、塵主を除くの外は、皆女流の手によりて表はれたり。

元來日記、紀行は、先登既に云へる如く、共に實用に供するよりは、寧ろ娛樂の爲に作りし物なれば、過去に於ける人情風俗を知らんと欲する者、必ず一讀すべきものなり。草子類に至ては、枕草子を除くの外は見るべきものなし。今左に數種の解題を記し、併て其参考書を紹介せん。

紫式部日記 二卷 本書は、紫式部が、夫宣孝に別れて後、寡居せる時の作にして、其はじめ、上東門院へ奉仕せし折に起りし事實、大小となく記せるものにして、中にも後一條帝及び後朱雀帝誕生の事、道長式部に懸想せし事、日本紀局の名を取りし事など、委しく書せり。文章は源氏の如く緻密濃艶なるにあらで、尤も簡に尤も輕快に記せり。本書の註釋としては、

紫式部日記傍註 二冊

壺井 礎 知 著

卷首に式部の系圖を附し、本文に傍註、頭註を施し、尤も見易く書せり。

紫式部日記講義 一冊

三木 五百 枝 著

諸書を参考して、尤も詳かに解釋をなしたるものにして、初學者の研究には、大に便利なるものなり。

**更科日記** 一卷 本書は、菅原孝標の女の書きたるものにして、書中康平元年の出來事など書きたれば、思ふに後冷泉帝の末年頃に出來しならん。さすれば、今を去る八百四十餘年前なり。載する處紀行あり、日記あり、隨筆あり、縁起ありて、純然たる隨筆體を具へたり。本書の註釋としては、甚だ少なし。漸く近年に至りて、二三種あらはれたるのみ。

更科日記零解 一冊

關根 正 直 著

更科日記講義 一冊

大塚 誠 太郎 著

中にも更科日記講義は初學者に便なり。

**和泉式部日記** 一卷 一名和泉式部物語と云ひて扶桑拾葉集にも納めたり。こは冷泉帝第四の皇子敦道親王が式部の許に通ひ給ひし事の始終を書し、數多贈答の歌をのせたり。本書は文章を賞せんよりは和歌を賞せよと古人の云へる如く、實に其歌はめでたし。本書の註釋としては未だ世になし。只文學全書第二編に納めしのみ。

**蜻蛉日記** 八卷 本書は攝政兼家の夫人の日記にして、其初め兼家の通ひ初めしより筆を起し、其翌天曆九年道綱誕生の事、應和三年道綱殿上の事、天祿元年元服の事など書し、天延二年に至る凡二十

一年間の事を記せり。されども今傳はる書には天德三年より應和元年に至る三年の記事を脱せり。本書の註解としては、

蜻蛉日記解環 十八冊

坂 徹 仲 文 著

こは種々の本によりて校正し、凡例に於て、題號の事、文字轉訛の事、假名遣の事、大鏡、榮華物語附合の事など書し、餘卷にて解釋せり。こは尤もよき書なれども、今は容易に得難し。

**讚岐典侍日記** 一卷 堀河天皇に奉仕せし讚岐典侍の日記にして、嘉承二年五月同天皇御惱より筆を起し、明年鳥羽天皇御即位より、大嘗會の事に至る迄の概略を記せるものにして、歴史の一部として大に見るべきものなり。本書の註釋書としては、只一の文學全書本あるのみ。

**枕草子** 三卷 我が文學界に於て源氏物語と併稱せられ、千餘年後の今日に至る迄、千古の寶典と仰がるは即ち、清少納言の著、枕草子なり。此書は元、清少納言記と云へり。

本書は清少納言、後一條帝の后宫へ宮仕せし程に、后兄伊周公、皇后へ料紙を獻せられし時、皇后、清少納言に、つれづれ思むる物かけと仰せられしかば、清少納言これを受けて書きたる由、奥書に見えたり。本書は唐の李義山の雜纂にならひて、記せしものにして、我邦隨筆文の嚆矢なり。其載する處、四季の風景、殿上の儀式を始めとして、人物事件、動植物に至る迄、凡そ興あるものは漏らすなく、

取りて之を評し、又は大宮人、諸姫嬪の一舉一動、直接に間接に、鋭利なる筆鋒を以て、利害得失を描寫したるは、實に輕快豪放、寸鐵人を殺すの力ありて、千歳の下眼前に之を見るが如き思ひあらしむるは、蓋し雅文中之に及ぶものなかるべし。今其註釋書の重なるものを列記し以て其參考の資となさん。

枕草子春曙抄 十三冊

北村季吟著

枕草子註釋書として殆ど完全なるものなり。卷首に清少納言の傳系、草子の題號、異本、稱美の事など書し、終りに本書を註釋したり。

同 三卷

鈴木弘恭校訂増補

枕草子裝束抄 一冊

壺井 磯 知著

本書は草子中であらはれたる、男女裝束を集め、諸書を引用して、解釋せるものなり。

枕草子詳解 洋本 三冊

松平 靜著

本書は後に出來たる丈ありて諸書を參考し、并に黒川眞頼博士、飯田武郷翁の説など加へ、又自のも加へて、一字一句註解したれば、尤も詳密なるものにして、初學者の爲めには大に便なり。

## 第二章 韻文學

桓武帝より清和帝に至る間は、殆ど漢詩の全盛なる時代にして、和歌は大に衰頹し、萬葉集以來其面かげだに見る能はざるの悲運に接したりき。

然るに延喜前後に至りては、在原業平、僧遍昭、小野小町などの歌聖出で、次て紀貫之、凡河内躬恒、などの如き名匠顯出し、漸く和歌の繁榮すべき氣運に向ひたり。此時に至りて、醍醐帝、貫之等に仰せて、萬葉集以來古今の歌を撰ばしめ給ふ。これ即ち當朝に於て歌の勃興せし、原動力となれり。貫之これを撰するに當り、其範圍を廣め、上は主上より下は賤男賤女に至るまでの秀歌を撰定し、延喜五年に上奏す。これ後世歌人の寶典たる古今和歌集なり。爰に於て、身は下賤ながら言の葉を天津空まで聞え上ぐるを無二の名譽として、此次なる選集には必ず選入せられん事を希望し、津々浦々の人に至る迄、これを詠するに至りしかば、久しからずして、猖獗を極めし漢詩を壓倒し、遂に和歌の全盛時代とはなりぬ。

爰に於て村上天皇の時には、和歌所さへ設けられ、天曆五年には梨壺五歌仙に勅して、後撰集の撰あり、次で一條帝の朝には拾遺集を撰ばせ給ひ、九十年後、白河帝又藤原通俊に命じて、後拾遺集を撰ばしめ給ひ、又近衛帝の時に至り顯輔詞花集を撰びたり。此間ひきまきらず輩出せる歌仙、各自に私撰集、私家集、など編纂する事流行し、又寛平以來、禁中及び繪紳の間に於て、歌會、歌合會など盛に流行し、以て當時の和歌壇に一種の異光を放ちたり。今之を畧記するに當り、便宜上左の四節に類別



せん。

一、當時の歌體 二、勅撰歌集 三、私撰集及家集 四、歌合

第一節、當時の歌體

當時代の和歌は、或る方面に向ひて、非常に發達して優に萬葉時代に匹敵せり。されども其結果、萬葉集時代とは非常なる變化を來し、口語と歌調と全く分離するに至れり。これ他なし。當時和歌は公卿間の専有物となりて、之を玩具視せらるゝに至り、口に諸ふを去て筆紙に上せ、其體調の巧緻を賞玩する事となりしかば、其中興と共に全く古代純樸の風一變し、婉麗優美の風と變じたればなり。且つ當時は漢學の餘炎によりて、巧に外國の事物を取りて、故事など讀み入れ、或は物名など讀み入るゝ事流行し、同時に歌會歌合會など盛に流行し、題を設けて其優劣を争ふに至り、各自歌枕を携へ、之によりて其地理風土を察し、一字一句靈妙ならんことを欲し、競ひて題詠を勵みしかば、歌人は居ながら名所を知るの弊風さへ起り、言辭も語調も大に改まり、全く自然を離れて作爲的の物となれり。されば萬葉時代に於て、韻文の骨髓たりし五七調の長歌も、全く跡を絶ちて、其作の見るべきものなし。若し和歌をして作爲的の者とせば、實に當時は短歌の黄金時代なりしならん。

歌體の變遷に就いては、小中村博士の論、簡にして要を盡したれば、今之を載せて參考に資せん。八代集に就て、其歌體を論ぜんに、後撰集村上天下の朝は風調と姿とを撰ばず、心志を先として撰びたる集

なり。拾遺集一條天皇の朝の頃より、後世の人情に近くなりて、趣旨隈なく顯れ、高遠ならざるを可とす。其弊は餘韻うすきにあり。(中略)後拾遺集白河天皇の朝に撰ばれたる歌は、稍々智巧に近くなりて、古風を失ひしに似たり。之を譬へば花も錦も共に美麗なれど、天造と人造との差別あるが如し。金葉詞崇徳近衛天皇の朝に至りては、又求めて興あらんとして、詞の云ひかけを好み、少しく俳諧歌に類せるもあり。是は當時名匠と呼ばれる、幾、漸く古今以來の風に飽きて、新奇を求むるより、醸し來れるにて、源俊賴、藤原基俊を其魁首とし、數名の歌人皆此風に靡きしものなり。然れども勅撰の集は、さすがに、姿の平穩なるのみ撰びたれば、異様なる歌の少なきを、百首、歌合、家集に至りては、達人の所爲として、心に求め得たる所を、泉の湧くが如く憚らず云ひ下し、或は方言俗言を用ひて、人の耳目を驚かせり。云々。千載集安徳天皇の朝の撰者、藤原俊成卿は、右の姿可ならずと思ひけん。殊に優美なる體をのみ撰びたれば、古今集の歌の細小になれる狀にて、其大畧は後拾遺の風の、少し實をよびたる者なり。然れ共爾後歌體大に變じ、高致幽艶の風となるべき漸とはなれり。云々。

第二節 勅撰歌集

勅撰集は務めて、優調なるもののみを撰びたるものなれば、之を以て當時の歌體は推知す可からず。されば終りに私撰集及び、家集をのせられたれば、之に依て知るべし。今は只前章に記せし古今集を始めとして、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集の七代集を、順次解題し併て其註釋書を紹介

せん。

古今和歌集 二十卷二本 醍醐天皇の延喜五年、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、四人命を受けて、萬葉集に入らぬ歌、及び撰者の自詠をも網羅して、奉りしものなり。

類別は四季、賀、離別、羈旅、物名、戀、雜、俳諧、旋頭歌の十種とし、歌數一千百首あり。

本集は、後世大に貴ばれ、必ず和歌を學ぶものは、之を讀まざる可らざるに至り、人々大に此の研究をばかりしかば、從て註釋書數多あらはれたり。今重なる者二三を記さん。

古今餘材抄 寫本 三十冊

釋 契 冲 著

古今集打聽 二十冊

加 茂 武 淵 著

古今集遠鏡 六冊

本 居 宣 長 著

本書は、尤も廣く行はれたるものにして、極めて簡単に、俗言を以て解釋したるものなり。初學者必ず見るべし。

古今集正義 洋本 一冊

香 川 景 樹 著

本書は、景樹の尤も力をこめて註釋したるものにして、中々創見多し。

古今集講義

本 居 豊 顯 著

こは近年大八洲學會にて講義せられしを、出版したるものにして、近來の好著なり。

後撰和歌集

二十卷二本

村上天皇の天曆五年に、源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、坂上

望城、の五人勅を奉じて、古今集以後殆ど五十年間の歌を撰集せり。世此五人を稱して、梨壺五歌仙

と云ふ。類別は、四季、戀、雜、別、旅、賀、哀傷の七種となし、歌數千四百二十首。

本集通解未だあらはれず。只一部解釋せしものは、

後撰集考 一冊

契 冲 阿 因 梨 著

後撰集新抄 十五冊

中 山 美 石 著

拾遺和歌集

二十卷二本

本集の撰者に就ては、花山院の御撰とも云ひ、或は一條帝の長徳年

中、大納言公任の撰とも云ひて、定説なし。然れ共、後拾遺の序、及び定家の説と合せ考ふるに、本

集は公任撰定して、奉れるものにして、花山院の撰と云へるは、此中より秀歌數句を撰出し、之を拾

遺抄と名け給ひしもの傳はれるより、かゝる疑も出來しならん。

類別は、四季、賀、別、物名、雜、神祇、戀、哀傷、歌數千三百五十一首。

本書の註釋としては、

拾遺抄註 群書類從の中にあり

顯 昭 法 師 著

以上古今、後撰、拾遺、をば三代集と稱し、後世歌人の重寶たり。

三代集通じて解釋せるものは、

辭案抄 三卷

藤原定家著

これ只其一部分のみを注したるものなり。

後拾遺和歌集 二十卷二本 拾遺集撰定後、九十年、白河帝の應徳三年に、中納言藤原通俊、撰定して奉れるものにして、澄源法師、大江佐國、之を扶助したりと。類別は四季、賀、別離、羈旅、哀傷、戀、雜、神祇、釋教、俳諧の十種とし、歌數一千二百十八首あり。

金葉和歌集 十卷一本 白河院の宣旨により、崇徳天皇の天治元年、源俊賴に命じて撰ばせられたるものにして、二年なりて上奏す。後拾遺撰定後、四十年なり。

類別は四季、賀、別、戀、雜、連歌、歌數、六百四十九首

勅撰集に連歌を入れたるは、之を以て嚆矢とす。

詞花和歌集 十卷一本 金葉集撰定後、七十年、近衛帝の仁平年中、藤原顯輔撰定せり。こは崇徳院の敷慮に出でしなりと。

類別は四季、賀、別、戀、雜、連歌、歌數、四百九首

詞花集解

能代瑞穂著

千載和歌集 二十卷二本 詞花集後四十二年にして、後白河院の宣により、後鳥羽帝の文治四年

に、藤原俊成之を撰集せり。此集元、賴朝幕府創立後になりしものなれば、無論武家時代に入る可きなれども、作者皆平安時代のものなれば、此處に載せつ。

類別は四季、別、旅、哀傷、賀、戀、雜、旋頭歌、物名、歌數一千二百八十四首。

以上の集に新古今集を加へて、八代集と云ふ。本書通じての註釋書は、

八代集抄 百八册

北村季吟著

八代集増抄 五十册

岸本山豆流著

等によりて研究せば明かなり。

第三節 私撰集及び家集

勅撰集の盛なるによりても推知すべく、當時は和歌極盛時代にして、公卿間の専有文學とさへ、呼ばれし程なれば、如何でか勅撰のみに飽かんや。各自思ひ／＼に秀歌を撰集し、或は各々の歌を取り集めたる者、綴々あらはれ、今に傳はるもの、一部の群書類從にすら、六百餘種を收めたり。他は推して知るべし。

元勅撰集は、歌體つとめて優麗ならんを欲し、撰者の好惡によりて、取捨したるものなれば、眞に歌體の沿革を知らんと欲せば、必ず私撰集、及び家集によらざる可らず。今一々記するの煩を避け、只時代

を代表すべき私撰集、及び女流家集を四つ五つ紹介せん。

新撰和歌集 四卷二本 本書は、醍醐帝、古今集の撰後、再び此集より尤も秀てたる歌を撰べど、貫之に仰せありしかば、貫之土佐國府にて之を撰びたるに、帝崩じ給ひければ、奏覽を經ずして止みたりと。

續詞花和歌集 二十卷二本 此も亦二條院の仰によりて、藤原清輔、詞花集中の秀歌を拔載せしむ、院崩御により勅撰に准ぜられざりしと、拾芥抄にあり。

四季、賀、神祇、釋教、哀傷、戀、別、旅、雜、物名、戲笑の十一に別ち、九百八十八首の歌をのせたり。

金玉集 一卷 大納言公任卿の撰にして、四季、戀、雜の四種に分類し、七十八首の歌をのせたり。玄々集 一卷 此は能因法師、一條帝以降、後朱雀帝に至る、四代間に輩出せる、歌人の、粹を拔載せるものにして、寫本一冊傳はれり。

三十六歌仙家集 十五卷 此は大納言公任卿の撰にして、歌仙三十六人の家集なり。此中女流家集を列舉せば、

- 齋宮女御集 一卷 小大君集 一卷 伊勢集 一卷 小町集 一卷
- 中務集 一卷

この解釋としては、

歌仙解難抄 三冊

三十六人歌仙傳 群書類從に收む

細川 幽齋著 作者不詳

此他群書類從和歌部より列舉せば、

- 嘉喜門院御集 經信卿母集 繪壺姫集 本院侍從集
- 小馬命婦集 馬内侍集 中務集 加茂保憲女集
- 二條院讃岐集 清少納言集 紫式部集 和泉式部集
- 相模集 赤染衛門集 伊勢大輔集 康資王母集
- 辨乳母集 出羽辨集 紀伊集 待賢門院堀川集
- 二條太皇太后大貳集

等主なるものなり。

### 第四節 歌合

村上帝の天徳中に至りては、和歌冲天の勢を以て、宮中に跋扈せしかば、滿廷の公卿之に心醉せし餘り、一の消閑的の慰物となし、遂には歌合と云ふ事起れり。

歌合と云ふは、二人或は左右と別ち、四季折々の歌、或は調度の品につきて歌を合せ、互に其技を比

較し、判者自己の意見を兩者に告げ、以て其優劣を決するなり。又衆議判とて、一同にて勝敗を定むるもあり。

降て堀河帝の時代に至りては、帝殊更に男女を拵せて、互に戀歌を贈答し、其優劣を定められてより、此事次第に流行し、遂には變じて艶書合せ、根合せ、前裁合せなど起るに至り、其元たる歌合盛に流行し、宮廷は更なり、貴紳の家にも日夜歌合會を催し、其優劣を決し、遂には熱心の極、病氣などもし、甚だしきは生命を損じたるものさへあるに至る、實に其流行甚だしきものなり。

其式に至りては、くたくしければ載せず。又當時歌合に次て、百首千首の事など流行したれ共、そは省きて、只、今に残れる歌合の著しきもの二三を記さん。

寛平歌合 寫本 一卷

寛平の御時の歌合にして題は菊名所なり。

寛平后宮歌合 寫本 一卷

春歌、夏歌、秋歌、冬歌、戀歌、各々二十番の歌合なり。

棋子内親王家歌合 寫本 一卷

題は春夜月、蹄雁、蛙、吳竹、早炭、藟、躑躅、にして作者は女房九人なり。

高陽院歌合 群書類從中に收む

長久弘徽殿女御歌合 同

永承祐子内親王家歌合 同

天喜后宮春歌合 同

堀河院艶書合 同 一卷

本書は、堀河帝の勅にて、興行したるものにして、作者は女房方にて周防の内侍、康資王の母、院の大進、前齋院の紀伊、四條の宮の甲斐、中宮の上總、一の宮の紀伊、女院の安藝、小大進等なり。尙此他、群書類從に收むる三十餘種の多きに及び。又百首千首など數多あれども省きつ。

### 第三章 作者略傳及び作例

#### 一、小野小町

小町の系圖につきては、種々の説ありて詳ならず。或は參議小野篁の孫なりといひ、或は小野真眞の女なりといひ、又は出羽郡司の女なりなどいへり。今いづれとも定め難し。

小町は仁明天皇の頃の人にして、和歌に巧なると、容貌の美麗なるを以て、世に名高し。紀貫之、古今和歌集の中に、小町の歌を評して曰はく、

小町の歌は、古への衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはよき女の、なやめ

る所あるに似たり。

と。これによりてその歌風を知るを得べし。さて、怪むべきは、この歌仙の行状につきて、未だ一定の論なき事なり。新井白蛾は、その牛馬問に論じて曰はく、

古代には、一國より一人づつ、采女を内裏へ獻せしめ、これを后町の内に居らしめ給ふれば、皆々小町と呼ばたり。既に仁明帝の前後に、小町とて名づけられたる者、六十餘名ありしとあり。其人々の宮仕を止めて故郷へ歸り、身まかりたるを埋めし墓を、大方小町塚と云ふ。さてこそ、國々に小町塚といふもの多き故よしなれ。云々。

あまり名高かりしたため、其傳記に様々の奇談ありて、七小町などいふものさへ出て来て、謡曲にも作られ、書にも寫されたり。乃ち、雨乞小町、鶺鴒小町、卒都婆小町、通小町、草子洗小町、關寺小町、玉造小町などありて、名高けれども、いづれも小説家の作り話に過ぎざるなり。

僧正遍昭、出家して後、清水の觀音に通夜して、經を讀むことありしに、その聲の唯人ならず聞えしかば、小町その人ならんと怪しみて、

岩の上に旅寐をすればいと寒し

苔のころもを我にかさなむ

といひ送りけるに、直に返歌あり。

世をそむく苔の衣は唯ひと

重ねば陳しいさ二人ねん

さればこそ、遍昭よと思ひて、その讀經の聲をしるべに尋ね行きしに、かきけすやうに失せて、一寺を求むれども、遂に行方を知らずといふ事の、大和物語に出でたるは事實なりや。世に玉造小町壯衰書といふものありて、群書類從に收めたり。中に小町年老いて、道路に乞食することを載す。以て小野小町となし、十訓鈔、著聞集皆その事を載せ、玉造小町と小野小町とを一人となす。然れども小野と玉造とは異姓なり。故に今その説は取らず。

小町は、當時、文屋康秀、大友黒主、僧正遍昭、喜撰法師、在原業平等と並み稱せられて、六歌仙の一人なり。小野小町の事蹟を記せるものに、小町考といふ書あり。

○和歌 (小町家集)

○花をながめて

花の色はうつりにけりな徒らに我身世に經るながめせしまに

○或る人心がはりて見えしに

心から浮きたる舟に乗りそめて一日も浪にぬれぬ日々なき

○女郎花いと多くをりて見るに

名にし負はばなをなつかしみ女郎花折られにけりな我名だてに

○

やよや待て山ほどとぎす言傳てん我世の中に住みわびぬとよ

○怪しき事云ひける人に

結びきと云ひける物を結び松いかでか君に解けて見ゆべき

○山里にて秋の月を

山里のあれたる宿を照らしつゝ幾夜へぬらん秋の月かけ

秋の月いかなるものぞ我が心何ともなきにいねがてにする

○やむごとなき人の忍び給ふに

現まにはさもこそあらめ夢にさへ人目つゝむと見るが侘しき

○夢に人の見えしかば

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせば覺めさらましを

○人の心かはりたるに

色見えてうつろふ物は世の中の人の心の花にすありける

○忘れぬめりと見えし人に

今はとて我身しぐれとふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

○定まらずあはれなる身を嘆きて

螢の住む浦こゝ舟の楫をなみ世をうみ渡る我ぞかなしき

○康秀が三河守になりて、縣見には出でたゝじやと云へる返り言に

侘ぬれば身を浮草のぬを絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

五月五日菖蒲にさして人に

あやめ草人にぬたゆと思ひしは我身のうきに生ふるなりけり

○

木枯の風にも散らで人知れず憂き言の葉の積るころかな

○四のみこ、うせ給へる、つとめて風吹に

今朝よりは悲しき宮の秋風や又逢ふ事もあらじと思へば

○井手の山吹を

色も香もなつかしき哉蛙なく井手のわたりの山吹の花

○長歌一首

○うせたる人のわはれなる頃

久方の 空に柵引く 浮雲の うける我身は 露草の 露の命も まだ消ぬで 思ふ事のみ まろ小  
 すげ 茂さずまざる 新玉の 行く年月は 春の日の 花の匂ひも 夏の日の 木の下かげも 秋の  
 夜の 月の光も 冬の夜の 時雨の音も 世の中に 戀も別れも 憂き事も つらきも知れる 我身  
 こそ 心にしみて 袖の浦の ひる時もなく 哀れなれ 斯のみ常に 思ひつゝ 生の松原 いきた  
 るに 長良の橋の ながらへて 瀬に居る鶴の しま渡り 浦漕ぐ船の ぬれわたり いか浮世の  
 くにさみの 我身かけつゝ かけはなれ いか戀しき 雲の上の 人に逢見て 此世には 思ふ  
 事なき 身とはなるべき

一、伊勢の御

藤原繼隆の女にして、三十六歌仙の一人なり。容姿美しく心さま優なる上、歌文の道に堪能なると當  
 代の名匠たる貫之躬恒にもまさしく劣らざりき。  
 父は其官伊勢守なりしかば、呼名を伊勢といへり。一時藤原仲平に通じたりけるが、後に宇多天皇の御  
 寵愛を受け、寛平の年の末つ方、行明親王を生み奉れり。これより人貴びて伊勢の御、また伊勢の御  
 息所など稱へたり。

宇多天皇御讓位の後、世を遁れ大内山に入りて、専ら佛道を修行せさせ給ひしかば、伊勢もまた、浮  
 世のはかなきをかこちて、心靜に五條なる家に籠居し、獨風月に思を馳せたり。庭は苔砂青みわたり、  
 諸々の木立をかしく、くさくさの幽草を植えたり。春は柳櫻を眺むるに適し、秋は草花を賞するによ  
 ろし。家居の様は今昔物語に「母屋の籬にそひて、高麗紙の疊を敷き、其上に唐錦の褥しきたり。板  
 敷のみがゝれたる事、鏡の如く、影残りなくうつりて見ゆ」など、頗る風流に住ひ居たりけりぞ  
 見ゆる。

かねて中務卿敦慶親王に通じて、女中務を生む。中務また母につきて詠歌に巧にして、其歌は、古今  
 集、後撰集等に多く見ゆ。殊に、承平四年、皇后宮の五十の賀、同七年、陽成院の七十の賀に献せし和  
 歌の、屏風に記されたるなどは、いともめでたき事なりかし。盛者必衰の理は免れずして、伊勢はか  
 く風流に暮しけるが、やがてその家も人手にわたりけるにや、飛鳥川云々の歌あり。

○伊勢家集の一節

斯く帝女が居させ給ひて、二年と云ふに御髪下させ給ひて、仁和寺と云ふ處に住み給うて、時々后  
 の宮におはしませしける。后の宮も仕うまつる人も限りなう悲しと見奉る。元住み給ひし處に、帝おは  
 しまして、御とき、きこしめさず。仕うまつりし人など召しいで、御あろし給ふ。后の宮の御かた



よりよみて出し給へる。

言の葉にたえせぬ露はちくらんや

昔しちびゆる圓居したれば

御かへし、

海どのみまどめの中はなりぬなり

そながらあらぬ君が見ゆれば

となん。

この帝に仕うまつりて、子生みたりし人は、世に幸なきものなりければ、うみたてまつりし君は、八つにて失せ給ひにける。いみじく悲しと思へどかひなし。死なんと思へど死なれれば、夜ひるなげきわたるに、此みこに名けたりし人の云へりける、

思ふよりいふは愚になりぬれば

たどへて云はん言の葉もなし

と云へど、更にものもあはえねば、返事もせずなりにけり。歸りける年の五月に、時鳥のなくとまきて、獨りかこちける、

志での山こそてきつらん時鳥

こひしき人のうへ語りなん

今は心うがりて、もとの宮仕をなんしける。後の御心は、限りなくめでたくなまめきて、世にたぐひなくおはしましける。此程曹司には、前裁など、いとをかしう植えてなん住みける。秋の頃里に出てたるに、宮より、などか今迄は参らぬ。おそく参れば、花の盛も皆すぎぬへし。松蟲も啼きやみぬへかめりとなん、のたまはせける。御返事に、

松蟲もなきやみぬなり秋の野に

たれよぶとてか花見にもこん

御かへし、

呼ぶとしも聲はきこゆで花すいき

しのびに招く袖も見ゆめり

又かくきこゆさせたり。

人もきぬ尾花が袖に招かれて

いと仇なる名をやたてなん

御かへし、

我まねく袖ともしらで花すいき

色かはるごとと思ひわびける

ねめず奥に書きてまゐらす。

山川の音にのみきくもしきを

みをはやながら見るよしもがな

帝もなやましうせさせ給ける。遂に六月に隠れさせ給にける。あさましくいみじく悲くて、仕うまつりし人、さながら集まり、夜盡たきこひたてまつるに、帝の御わざの折にやうくなりぬ。

○和歌 (古今集)

○蹄馬をよめる

春霞たつを見すて、行馬は花なき里に住みやならへる

○水のほとりに梅花の咲きけるを

春毎に流る、川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなん

○亭子院歌合に

見る人もなき山里の櫻花ほかの散りなむ後に咲かまし

五月こは鳴きもふりなむ郭公まだしき程の聲をきかばや

○物名カラサキ

浪の花おきからさきて散り来めり水の春とは風やなすらん

○戀

まると云へば枕だにせで寐しものをちりならぬ名の空に立らん

夢にだにみゆとはみぬし朝な、我面影にはづる身なれば

わだつ海のおれにしとこそ今更にはらはし袖や泡と散りなん

冬枯の野邊と我身を思ひせばもねても春を待たまし物を

○中務のみこの家の池に船をつくりて下し初て遊びける日

水の上に浮べる船の君ならばこゝろとまりと云はまし物を

○龍門にまうで、

たちぬはぬ衣きし人もなきものを何山姫の布さらすらん

○桂に侍ける時に七條中宮のとはせ給へりける御返事に奉りける  
久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる

○家を賣りてよめる

飛鳥川淵にもあらぬ我宿もせにかはり行く物にぞ有ける

○長歌

○七條の后うせ給ひにける後によめる

沖つなみ 荒れのみまさる 宮のうちは 年へて住し 伊勢の蜚も 船ながしたる 心地して よら  
ん方なく 悲しきに 涙の色は くれなゐは 我等が中の 時雨にて 秋の紅葉と 人々は 己が散  
りく 別れなば 頼むかけなく なりはて、止まる物とは 花すゝき 君なき庭に 群れ立ちて  
そらを招かば 初かりの 鳴き渡りつゝ よそにこそ見め

三、右大將道綱母

東三條攝政兼家の妻にして、藤原倫寧の女なり。天曆の末年、兼家いまだ兵衛佐にてありし時、この  
倫寧の女に通じて、折々和歌の贈答などしけるが、やがてその腹に道綱の生れしより、程なく北の方

どはなりしなり。

大鏡、道綱の事をいふ條に

御母は極めて歌の上手にてたはしければ、此殿(兼家)の通ひ給ひけるほどの事、歌など書き集めて  
蜻蛉日記と名づけて、世にひろめ給へり。

とある如く、天曆八年より、天延二年まで、即村上、冷泉、圓融の、三朝二十餘年間の事を物せり。これ  
によりてその人の平生と文才とを知ることを得べし。

蜻蛉日記、天曆九年の條、兼家と贈答の歌に、

なげきつゝ、獨ゆる夜の明くるまは

いかにひさしきものどかはしる

とよみてつかはしければ、兼家

げにやげに冬の夜ならぬ楨の戸も

あそくあくるはわびしかりけり

又拾遺集なる、郭公名歌の一首に、

都人ねて待つらめや時鳥

今は野山を鳴きて出づなり

○晴蛉日記の一節

申の終ばかりに、寺(石山)の中に着きぬ。浴室に物などしきたれば、いきて臥しぬ。心地せん方しらず苦しきまゝに、臥しまるびでて泣かる。夜になりて湯などものして、御堂に上る。身のあるやうを佛に申すにも、涙に咽ぶ。とかく云ひもやられず。夜うち更て、外の方を見出したれば、堂は高くて下は谷と見えたり。片岸に木ども生ひこりて、いと暗がりたる。二十日(七)の月、夜更けていと明るければ、木影にもりて、所々に前の方ぞ見えわたりたる。見下したれば、麓にある泉は鏡の如く見えたり。高欄に押しかかりて、とばかり守り居たれば、片岸の草の中に、そよ／＼しならしたるもの、怪しき聲するを、こは何ぞと問ひたれば、鹿と云ふなりと答ふ。などか例の聲には鳴かざらんと思ふ程にさしはなれたる谷の方より、いとうら若き聲に、遙かにながめ鳴きたんなり。きく心地空なりと云へば、あるかなり。思ひ入りて行ふ心地、もの覺えで尙あれば、見遣りなる山のおなたばかりに、田守の物追ひたる聲、いふがひなく情なげに打ち呼びたり。かうしも取り進めて、肝を碎くこと多からんと思ふぞ、はてはあきれてぞ居たる。さて後夜行ひつればありぬ

○同

前栽の花いろ／＼に咲き亂れたるを見やりて、臥しながら、かくぞ云はる。互に恨むる様のことゝもあるべし。

百草に亂れて見ゆる花の色は

ちく白露のちくにやあるらん

どうち云ひければ、かく云ふ。

身のあきを思ひみだるゝ花の上に

うちの心は云へばさらなり

など云ひて、例のつれなう夜更けて、寐待の月の山の端出る程に、出でんとする氣色あり。さらでありぬべき夜かなど、思ふ氣色や見けん。宿りぬべき事あらばなど云へど、さしも覺はぬば。

いかいせん山の端だにどゝまらて

こゝろの空にいでん月をば

かへし、

久方の空に心の出づと云へば

かげは底にもとまるべきかな

とて止りにけり。扱て又、のわきの様なることして、二日ばかりありて來たり。一日の風はいかにせん。例の人は問ひてまし。と云へば、實にぞや思ひけん。

言の葉は散りもやするとどめ置て

けふはみづからも問ふにやはあらぬ  
と云へば、

散りきても問ひぞしてまじ言の葉を

東風はさばかり吹きしたよりに

かく云ふ。

こちと云へば大空なりし風にいひ

つけては問はんわたらなだてに

まけじ心にて又、

散らさじと惜みちきける言の葉を

きながらだにぞ今朝はどほまし

これはさも云ふべしとや、人ことわりけん。

#### 四、馬内侍

内侍は、右馬權頭源時明の女なり。一説に赤染衛門の妹なりといふ。

一條院皇后にめし仕はれて、女房となれり。立后の時、本宮掌侍となる。性質温雅にして、幼き時よ

り風流の志あり。好みて和歌を詠みたり。

中古和歌に堪能なる人々を撰びて、三十六歌仙と云ふ名起りけるが、内侍は即ちその中の一人なり。歌集あり。その中に、藤原道隆兵衛佐たりし時、内侍と契りて、和歌を贈答したることなども見ゆ。

#### ○和歌「内侍家集」

○三月、中宮の御方に花を壺に挿させ給ひて

これが散る心よめと、仰せられしかば

散らじとや頼め初めけんはかなくもとまらぬ花に添ふ心哉

○つれづれなる日人の文をこせるに

春日野に誰か待つとはつげつらん今日の子の日に鶯の鳴く

○或人、昔に似たる梅の花哉と云たりしかば

梅の花むかしのとをうたがへど空の氣色のかはれるやなぞ

○昔見し所の花を、或る處に植ゑさせ給ひたりければ

宿かへて匂ひ劣るな梅の花昔し忘れぬ今日に逢ふらん

○たのむべくもあらぬ人の許に

散る花に枕さだむと見し夢は明る夜頃を幾夜かぞへん

○夜更けて郭公の聲一度鳴きて止みぬれば

宿々に鳴く音は夢かほどゝさす寐ぬ我ばかり聞よしもがな

○御文一度ありて又れどづれなければ

とぶ盛まとの戀にあらねども光ゆゝしき夕やみの空

○語ふ人のあはぬ頃郭公の鳴きつれば

心のみ空になりつる郭公人の爲なる音ころなかるれ

○昔の友達の許より文の中へ橋を入れてお

こせし歌のかし

思ひきや花橋の香ばかりも戀しき人にならんものとは

○たび寐のどころより

獨りぬる宿にふすぶる蚊遣火の小夜更け方にもはかはりつゝ

○

○

色々の花のなかにも女郎花いかなる枝に露とまるらん

○

秋風の吹けば亂るゝ花すゝき結びし心われに告げなん

○いたく荒れたる人の家に菊面白く咲けり

木枯のしげる紅葉に跡たえて人も見え來ぬ宿の白さく

○七日今日の空の氣色いかいと云ひければ

嘆きつゝ天の川波ながむれば絶間がちなる雲ぞわたれる

○

君をのみまつ蟲の音のある物を何れの野邊の露にぬらん

○思へるとよめと宮より仰せられしかば

寐覺して誰か聞くらん此頃の木の葉にかゝる夜半の時雨を

○山里なる人に雪の降る日

降ればかつ消ぬる雪と知りながら何山里の強て戀しき

○人の小松と云ふ處に侍りしに、つかはしける

朝ぼらけ思ひやる程もなき小松は雪に埋もれぬらん

○つゝむとある人に

○

峯の雪谷の水にとぢられて跡見え難き三輪の山もと

○あからさまに来る人の返りなんとするに時雨の少しすれば  
かき曇れしぐるとならば神無月けしき空なる人やとまると

五、檜垣

檜垣は、肥後の國の遊女なり。容貌美はしく、敷島の道にも暗からざるを以て、都の空までも其名を知られたり。天慶中藤原の純友謀反して、民家を焼き土地を荒らし、其資財を奪ひなどしけるより、檜垣はこれが爲めに大に零落を極めたり。

太宰大貳、小野好古、勅を奉じて純友をうち、肥後の白河を過ぐるや、從者を顧みて、われ檜垣の和歌を能くすることを聞くこゝに年あり。されどかつて見たることなし。今幸ひにこゝに来れば、いつ一たび見まほしきものなりといふ。時に老嫗の弊衣を付け、跣足にて水を汲むあり。從者指して、彼ころ即檜垣女に侍れといへば、好古いたく老衰せるに驚き、その故を問はんとしけるに、檜垣耻ぢて至らず、歌を送りける、

うばたまの我黒髪もしら川の

みづはくむきて老いにける哉

好古感且憐み、フコトカキナ箱一襲を脱ぎて與へたりとか。家集あり。後世中島廣足が其落ちたるを補ひ、檜垣女家集補註として二冊世に出されたり。

○家集の内

筑紫から率てのぼりてある男、もとのめのもとにすゑたる、心いよくて、うち睡らひ居たるに、男はこゝかして、人の國にのみありきければ、二人のみなん居たりける。筑紫より來りたる女、いと忍びて、男をかたらひたりけるに、いとかう云ひける、

夜半にいでも月だに見ずばあふことを

まらず顔にもいはましものを

このもとの女、心いとよき人にて、男にも、かゝる事なむあると云はざりけれど、男外の方より、人睡ふなりとききて、思ひたりけれど、心にもいれで、なほ、さるものにてなむ置きたりける。さて此男、女のこと人に物云ふをききて、其人と我と何れをか思ふと、問ひければ、

花すゝき君が方にぞなびくめる

あもはぬ山の風は吹けども

となん云ひける。又よばふ男もありけり。世の中心憂し、斯ることきゝ入れじなど云ひけるものなむ。此男とやうく思ひつきやしにけむ、かへりごとなどして、もとのめのもとに文を引結びて、あ

こせたるを見れば、斯くかいたり。

身をうしと思ふ心にこりねばや

人をあはれと思ひそむらむ

と、こりずまに讀たりける。斯て心のへだてたる事もなく、あはれなれば、いとあはれと、思ふほどに、男は心かほりにければ、ありしこともあらねば、かの筑紫に、親兄弟などありければ、男も心かはりにければ、と、いめでなんやりける。もとのめなん、もろ共にありならひにければ、かくて行く事を、いとかなしと思ひける。山崎に諸共に行て、舟にのせなどする程に、男も來り、このうはなりこなみ、一日一夜、萬の事を睡らひて、つとめて舟にのりぬ。今は男どもの女は、かへりなんとて車にのりぬ。これもかれもいとかなしと思ひけるに、舟にのりたまひぬる人のとて、女をなん持て來り、たゞかくありける。

ふたりこし道とも見えぬ波のうへを

思ひかけてもかへすめるかな

とありければ、男も、もとの女も、いといたうあはれがり、泣きにけり。漕ぎ出でぬれど、え返しをもせず。車は舟の行くを見てを行かず。舟にのりたる人は、車を見ると、面をさし出て漕ぎ行けば、遠くなるまゝに、顔はいとちひさくなるまで、見おこせければ、いと悲しかりける。

相知りたりける人の、忍びて男あるに、逢はんと云へば、家の垣を夜更けて叩け。さらば起きてあらんと云ふに、逢ひたる程、五六日程男の音もせねば云ひやりし、

さいれ石のれと絶えにけり逢ふとの

かたき巖となりやしぬらん

### 六、紫式部

紫式部は、藤原冬嗣の後裔、越前守爲時卿の女にて、母は常陸介爲信の女なり。

式部天性慧智、幼にしてよく學を家庭に學び、一を聞き十を悟るの英才ありしかば、父爲時卿はいたく感ぜられて、その男子たらしざるを惜しみけり。長じて藤原宣孝に嫁さけるが、程なく宣孝は病にかかりて、長保二年四月二十五日にみまかりぬれば、式部ははかなくも寡婦となりぬ。

我國文學中に一大貢獻をなしたるものは、げに式部その人にあり。彼の和文の至寶とも稱せらるゝ源氏物語は、寡居の中に筆を染めて作れる者なりといふ。外に日記あり、即ち紫式部日記といふ。これは上東門院に仕へ奉りてよりの事を、見たるまゝ、聞きたるまゝ、さては思ふまゝを書きうつしたるものなれば、よく當時の儀式、風俗を知り、兼ねてまたその人となりをも推知せらるゝ良書なり。

源氏物語は、古來未曾有の大著述にして、人或は一女子の手になれるを信せず、或は父爲時の意匠に



なれりといひ、或は道長の加筆ありしなど云へど、文章の優美、物語の非凡なるより、とやかくと説を唱ふるまでにて、紫式部ならでは、いかで之をよくすべからん。紫式部日記に比し、その筆法の同一なるを見ても知るべし。

後式部が才徳世にあまねく知られ、遂に上東門院に召し出されぬ。こは寛弘二三年頃の事なり。その見参のさまを今昔物語に曰はく、

式部がありさま、かゝるめでたき事ども作り出したる人ども見えす、裳唐衣きたる姿容體もてなしなど、いとあやしう心もなげにてぞ侍りける云々。

才徳雲井にまでひいたれども、式部は敢て高慢の心なく、上東門院に史記の講義を聞えまつる折しも、いとつしましう志たりけりとぞ。

一説に、源氏物語は村上天皇第十の宮選子内親王より、上東門院に何か珍しき物語は無きかど問はせ給ひしかば、門院式部に仰せ書かせて奉り給ふ。式部は仰を蒙るや、石山の観音に通夜して加護を祈願せしに、折しも八月十五夜、明月の湖上に浮びしかば、物語の趣向たちまち心中に躍り出でたり。よりて佛前の大般若經書寫する料紙を取りて、まづ須磨明石の二巻より、筆を起したりと。然れどもこれは學者の取らざる所にして、全く俗説といふべし。

一條天皇、この物語をよませ給ひて、この人は日本紀をこそ讀みたまへけれ、誠に才あるべし、との

給はせけるより、日本紀の局なども呼ばれたりとか。

式部はもと藤原氏なれば、始は藤の式部と呼ばれけるを、源氏物語の中にて紫の上の事をすぐれて面白く書きたるより、紫々とよばれて、いつしか紫式部の名を得たるなりといふ。この説信に近し。

貞操の正しかりし事は、日記の中に、道長の戯れいひかけたる歌の返しに、

人にまだ折られぬものを誰か此

すきものすとは口ならしけん

と言ひたたるにも知られ、又管絃の道にさへ達せし事は、人の琴教へてといひけるに答へて、

露しげき逢がもとの蟲の音を

ねぼろげにてや人の尋ねん

と詠みたる歌の千載集に入りたるを見ても知らるべし。

二女あり、姉を賢子と云へり。大宰大貳高階成章に嫁し、後一條天皇の御乳母に召されて、三位を賜はりしかば、大貳三位と呼べる。母の教育を受けて歌文をよくし、狭衣物語を作りたり。妹は辨の局とて、左衛門督兼盛に嫁しけるが、後に後冷泉院の御乳母となりぬ。

○蓬生の宿 (源氏物語)

野分たちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思ほし出づる事多くて、鞆負の命婦と云ふを遣はす。夕

月夜の、をかしき程に、出し立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうの折りは、御遊などせさせ給ひしに、心ことなる物の音を聞きならし、はかなく聞え出る言の葉も、人よりは異なりしけはひかたちの、面影につとそひて思さるゝも、闇のうつゝには尙劣りけり。命婦かしこにまか、でつきて、門引き入るゝより、けはひおはれなり。やもめ住なれど、人ひとりの御かしつきに、どかくつくるひ立て、めやすき程にて、過し給ひつるを、やみにくれて、伏し沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいと荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらず、さしいりたる。南面にちろして、母君、とみにえものもの給はず、今までとまりぬるが、いと愛きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、いと耻しうなむとて、實に堪ふまじく泣い給ふ。乗りてはいと心苦しう、心肝もつくる様になむと、内侍のすけの奏し給ひしを、もの思ひ給へ、知らぬ地にも、實にこそいと忍びがたう侍りけれとて、やためらひて、仰せ言傳へきこゆ。暫しは夢かどのみたどられしを、やうく思ひ鎮まるにしも、覺むべき方なく堪へ難きは、いかにすべきわざにかとも、問合すべき人だになきを、忍びては参り給ひなむや。若宮のいと覺束なく、露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝと、とく参り給へ。など、はかくしうもの給せやらす、咽せかへらせ給ひつゝ、且は心もよわく見奉るらむと、思ほしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの、心苦しさに、承はりもはてぬやうにてなむ、まかで侍りぬるとて、御文たてまつる。目も見に侍らぬに、かくかしこき仰言を光にて

なむとて見給ふ。程経ば打まざるゝ事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難きは、わりなき業になむ。幼なき人もいかに思ひやりつゝ、諸共に育ばくまぬ覺束なさを、今は尙昔のかたみに准へて、ものし給へなど、細やかに書かせ給へり。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に

小萩がもとも思ひころやれ

とあれど、え見給ひはせず。命長さの、いとつらう思ひ給へ知らるゝに、松の思はむとだに、耻しう思ひ給へ侍れば、百敷に行きかよひ侍らむことは、ましていと懼多くなむ。かしこき仰言を度々承りながら、自らは、いなむ思ひ給へたつまじき。若宮はいかに思ほし知るにか。参り給はむことをのみなむ思し急ぐめれば、ことわりに悲う見奉り侍るなど、うちく思ひ給へる様を奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、いましうかたむけなく、などの給ふ。

宮は大殿ごもりにけり。見奉りて、くはしく御有様も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべしとていそぐ。くれ惑ふ心の聞も、堪へ難き片端をだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを、私ひそにも心のどかにまかで給へ。年比おもたしき序ついでにのみ、立寄り給ひしものを、かゝる御消息にて見奉る、かへすゝつれなき命にも侍るかな。生れし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言いまはとる迄、只この人の宮仕の本意必ずげさせ奉れ。我れなくなりぬとて、口惜う思ひく

づほるなど、かへすく戒め置かれ、侍りしかば、はかしく後見思ふ人なきまじらひは、中々な  
るべき事と、思ひ給へながら、只彼の遺言をたがへじとばかりに、出し立て侍りしを、身に餘るまで  
の御志の、萬にかたじけなきに、人氣なき耻を隠しつゝ、交らひ給ふめりつるを、人のそねみ深く積  
り、やすからぬ事多くなり添ひ侍るに、よこさまなるやうにて、つひに斯くなり侍りぬれば、かへり  
てはつらくなむ、かしこき御志を思ひ侍る。これもわりなき心の闇と、云ひもやらず咽せかへらせ給  
ふ程に、夜も更けぬ。うべもしかなむ。我御心ながら、おながちに人目驚くばかり、たぼされしも、  
ながるまじきなりけりと、今はつらかりける人のちぎりになむ。世にいさゝかも人の心をまげたる事  
はあらじと思ふを、只この人故にて、數多さるまじき人の、恨を自ひしはては、かう打すてられ  
て、心をさめむ方なきに、いと人悪く、かたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ、と打かへ  
しつゝ、御しはたれがちにてのみ座すと、語りてつきせず、泣くく夜いたう更けぬれば、今夜過さ  
ず御返事奏せむとて、いそぎまゐる。月は入方の空清うすみ渡れるに、風いと涼しく吹きて、草むら  
の蟲の聲々催しがほなるも、立はなれにくき、草のものとたり。

鈴蟲の聲の限をつくしても

長き夜あかずふる涙かな

えも乗りやらず。

いとしく蟲の音繁き淺茅生に

露置そふる雲の上人

かごども聞えつへくなむと云はせ給ふ。

○紫式部日記の一節

十一日のあかつき御堂へ渡らせ給ふ。御車には殿の上、人々は舟にのりてさしわたりけり。それには  
後れてようさりまゐる。教化を行ふ處、山寺の作法うつして大懺悔す。しらい塔など多う繪にかいて  
興じ遊び給ふ。上達部多くはまうで給ひて、少しぞとまり給へる。後夜の御導師教化ども説相皆心々  
廿人ながら、宮のかくておはしますよしを、こごかひきしなことは、たえて笑はるゝ事も數多あり。  
ことにて、殿上人舟にのりて、皆漕ぎつゝきて遊ぶ。御堂の東のつま、北向におしあけたる戸の前、  
池につくりおろしたる、橋の高欄を押へて、宮の大夫は居給へり。殿あからさまにまゐらせ給へる程、  
宰相の君など物語りして、お前なれば、うちとけぬようい、内も外もをかしきほどなり。月おぼろに  
さし出で、若やかなる公達今様歌うたふも舟にのりおほせたるを、わかうをかしく聞ゆるに、大藏  
卿のあふなくまじりて、さすがに、こゑ打そへんもつゝまじきにや、しのびやかにて居たるうしろ  
でのをかしう見ゆれば、御簾の内の人も、みそかに笑ふ。舟の内にや老をばかこつらむ、と云ひたる  
を、きつけ給へるにや、太夫、徐福、文成詭譎おほし、と打ち誦し給ふ聲も様も、こよなう今めかし

く見ゆ。池のうき草と謠ひて笛など吹き合せたる、曉方の風のけはひさへぞ心ことなる。はかないこども所がらをりからなりけり。

○同。

源氏物語の前にあるを、殿の御らんじて、例のすゝる言もいで来るついでに、梅の枝に、しがれたる紙に書かせ給へる、

すき物となにしたてれば見る人の

そらですぐるはあらじと思ふ

たまはせられたれば、

人にまだ折られぬ物を誰かこの

すきものぞとは口ならしけん

めざましうときこゆ。

渡殿に寐たる夜、戸をたたく人ありときけど、恐ろしさに音もせてあかしたるつとめて、

よもすばら水鶏よりけになくくぞ

まきの戸口にたゝきわびつる

返し、

たいならじとばかり叩く水鶏ゆゑ

あけてはいかにくやしからまし

○和歌 (紫式部集)

春なれど白ねのみ雪いや積りどくべき程のいつとなき哉

○櫻を瓶にさして見るに、とりもあへず散りければ、桃の花を見やりて

折て見ばちかまさりせよ桃の花思ひくらしして櫻をしまじ

○ほととぎす鳴かんといふ曙に片岡の梢をかしければ

郭公聲まつほどは片岡の森のしづくに立ちやぬれまし

○

神代にはありもやしけん山櫻けふのかざしに折れるためしは

○六月ばかりなでしこの花を見て

かきぬわれさびしさ勝る常夏に露ねきそはん秋迄は見じ

○久しく訪れせぬ人に

たが里もどひもや來ると郭公心の限り待ちやわびにし

○七夕

大方を思へばゆかし天の河けふの逢瀬はうらやまれけり

○童萩の花に立寄て折り取る所の繪に

さを鹿のしかならばせる萩なれや立よるからに己れ折れ伏す

○女郎花を殿のもて來給へば

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

○菊繡を上の御方より賜へるに

菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代は譲らん

○初雪ふりたる夕ぐれに

荒ればかく憂さのみまさる世をしらて荒たる庭に積る初雪

○

水海に友呼ぶ千鳥ことならばやすの港を塵絶えなせそ

○

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲隠れにし夜半の月哉

○

世の中をなになげかまし山櫻花見る程の心なりせば

○ 春の夜の闇のまよひに色なら口心に花の香をぞしめつる

○

打はらふ友なき頃の寐覺にはつがひし露ぞ夜半に懸しき

○

暮ぬ間の身をば思はで人の世の哀れを知るぞかつは悲しき

### 七、清少納言

舍人親王の十代の孫に當る、清原元輔卿の女なり。一條天皇の皇后、定子に仕へ奉りて、かの紫式部と並び稱へられし、和文の大家なり。清原氏の女といふ故を以て、清少納言と呼ばれたるなり。少納言とはもと太政官の判官にて、常に天皇の傍に侍りて、官印を鑑み掌る男子の官名なるを、こゝに女子にして少納言と云へるは、如何なればか。當時は皇后宮の御方にもさる同じ官のありしにや。清女が天才慧智萬人にすぐれたる事は、たゞかりそめに記せし文章の、まかも國文の至寶なりと稱せらる、枕草子につきても知るべし。げに春は曙、ほのくゞと筆そめ出せし匂ひなど、いひまらざめてたく、文の林の奥ふかく分け入れば

るの響、天籟か、人籟か、或は金石の自ら聲あるが如く、忽然として筆を止めたる、調も妙にかなづる琴の糸切れたるが如し、所謂寸鐵人を殺すの筆法は、實に清女が特筆といふべし。

清女が歌は、僅に數十首に過ぎず。その故は父元輔卿は、村上天皇の朝に、勅を奉じて後撰集を撰びし、梨壺の一人にて名高き歌人なりければ、己はその娘ゆゑ、なまじひに詠みて、親の名をも穢さん

は本意なきわざなりとて、詠まざりしと云。されどその詠める歌はめてたく、當時の人々も大に賞讃したり。清原家の聲名は、げに清女の才學によりて、いよ／＼高まりたりといふべきなり。

清女は滯落の女子なり。紫式部に比へては品行の落ちたる方もあらんが、なべて平安の朝は、淫風の吹きすさびたる時代にて、大内の女房たちの中にも、屢よからぬ風説ありき。紫式部が著はせる源氏物語などの、淫靡なる小説が、大に世に愛讀せられしを見ても、よく當時の風俗の一斑を推知するに足るべし。

ある時雪の降りけるに、皇后の御前に侍りしかば、皇后は女房たちに向ひ、香爐峯の雪は如何にと仰せらるゝに、清女直に立ちて御籬を捲きたるは、世に有名なる事實にして、又以てその才の鋭敏なるを見るべし。これ白氏文集、白樂天の詩に、

遺愛寺鐘歇枕聽 香爐峯雪撥籬看

とある句を即坐に思ひ浮びたるなり。誠に驚くべき慧智機才ならざや。

かばかりに英才なりければ、内侍にもなすべき沙汰などの専なりけるを、口惜しや、皇后の御父道隆公のかくれ給ひて、道長公關白となり、上東門院入内ありて中宮に立たせ給ひ、後には伊周公隆家卿など流され給ひ、皇后の宮も御子生まれ給ひけれどかくれまし、御妹の淑景舍も次で失せ給へれば、清少納言もよろづものわびしく、さては昔住みける草庵に歸りて、さびしく世をすゞしけるとかや。

一日殿上人あまた清女の家の前を通り給ふことありけるに、家のあれたる様、垣のくづれたるなどを見て、少納言は無下にこそなりにたれど車のうちにて云ひ給ふを聞きて、少納言忽ち籬をかきあげ、駿馬の骨をば買はずやあると譏りかへせし言葉、貧窮に屈せざるその氣慨の程を見るべし。

○鳥は(枕草子)

こと所の物なれども、鸚鵡いとあはれなり。人の云ふらん事をまねぶらんよ。郭公。水鶏。鴨。みこ鳥。ひわ。山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せれば、なぐさむらん、いとあはれなり。谷へだてたる程などいと心苦し。鶴はこちたき様なれども、鳴く聲雲井まできこゆらん、いとめてたし。頭赤き雀。いかるがのを鳥。たくみ鳥。鶯はいと見る目も見苦し。眼なども、うたて、よろづになつかしからねど、ゆるぎの森に獨りは寐じと争ふらんこそをかしけれ。はこ鳥。水鳥はをし、いとあはれな

り。かたみにあかはりて、羽根の上の霜を拂ふらんなどいどをかし。都鳥。川千鳥は友まどはすらんこそ。鴈の聲は遠くきこえたるあはれなり。鳴は羽根の霜打拂ふらんと思ふにをかし。鶯は文などにも、めでたきものに作り、聲より始て、様かたちも、さばかりあてに、うつくしき程よりは、九重のうちには鳴かぬぞいとわろき。人のさなんあると云ひしを、さしもあちとと思ひしに、十とせばかり侍らひてきしに、まごどに更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよくかよひぬべきたよりなりかし。まかでしきけば、怪しの家の見所もなき梅などには花やかにすなく。夜なかぬもいざたなき心地すれども、今はいかいせん。夏秋の未まで老聲になきて、蟲食など、ようもあらぬものは、名をつけかへて云ふぞ、口惜しくすごき心地する。それも雀などやうに、常にある鳥ならば、さも覺ゆまじ。春なく故こそはあらめ。年立ちかへるなど、をかしき事に、歌にも文にも作るなるは、尙春の内ならましければ、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世の覺はあなづらはしうなりそめにたるをば、そしりやはする。鶯鳥などのうへは見入れ聞入れなどする人、世になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり。祭のかへさ見るとて、雲林院知足院などの前に、車をたてたれば、郭公も忍ばぬにやあらん鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中に、諸聲に鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。郭公はなほ更に云ふべき方なし。いつしかしたり顔にもきこは、歌に、卵の花、花橋、などにやどりをして、はたかくれたるも、ねげなる心ばえなり。

り。五月雨のみじか夜に寐ざめをして、いかで人より先に聞かんと待たれて、夜ふかく打出でたる聲のらうくしう、愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せん方なし。水無月になりぬれば、音もせずなりぬる、凡て云ふも愚かなり。夜鳴くものすべて、何れもくめてたし。ちごどものみずさしもなき。

〇すさまじき物 一節 (枕草紙)

人の許にわざと清げに誓きたて、やりつる文の返事見ん、今は來ぬらんかしと、あやしくねそしと待つ程に、ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげに持たしふくだめて、上に引きたりつる墨さへ消えたるを、おこせたりける、あはしまさいりけりとも、若しは物忌とて取り出でず、などもてかへりたる、いとわびしくすさまじ。

又必ず來べき人の許に、車をやりて待つに、入りくる音すれば、さなりと、人々出て見るに、車やどりに入りて、轆ほうと打あろすを、いかなるぞと問へば、今日はあはしまさず、わたり給はずとて、牛のかざり引出でていぬる。(中略)

待つ人ある所に、夜すこし更けて、忍びやかに戸を叩けば、むねすこしつぶれて、人出して問はするに、あらぬよしなき者の名乗して來たるこそ、すさまじと云ふ中にも、かへすくすさまじけれ。

けんどの物の怪調ずとて、いみじうしたり顔に、どこやずい、など持たせて、せみ聲にしぼり出し讀み居たれど、いさゝかさりげもなく、さほうもつかねば、あつめて念じ居たるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまでよみこころじて「さらにつかず、立ちね」とてすゝとりかへしてあれど、「げんなしや」と打云ひて、ひたひより上さまに、かしらさぐり上げて、あくびを己れうちしてよりふしぬる。除目に司御ぬ人の家。ことしは必ずとききて、はやうありし者どもの外々なりつる。片田舎に住む者など、皆集り来て、出で入る車の轆もひまなく見え、物詣する供にも、我もくんと参り仕ふまつり、物食ひ酒飲みものしりあへるに、果つる曉迄、門たたく音もせず。怪しなど耳たて、きけば、先追ふ聲々して、上達部など皆出で給ふ。ものき、に宵より寒がりわななき居りつる下衆男など、いと物うげに歩み来るを、居るものどもは、問ひだにもえ問はず。外より來たる物どもなどぞ「殿はなに、かならせ給へる」など問ふ。いらへには何の前司にこそは、と必ずいらふる。まことに頼みけるものは、いみじうなげかしと思ひたり、つとめてになりて、ひまなく居りつる者も、やうく一人二人づすべり出てぬ。ふるき者の、さもね行きはなるまじきは、來年の國々を、手を折り數へなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり。

よろしうよみたりと思ふ歌を、人の許にやりたるに、返しせぬ。けそう文はいかいせん。それだに、折をかしうなどある返事せぬは、心おどります。又さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人の、己がつれくといとまあるまゝに、昔ねばにて、ことなる事なき歌よみしておこせたる。物の折の扇いみじと思ひて、心ありと知りたる人に、云ひつけたるに、其日になりて、思はずなる畫などかきてはたる。(下略)

### ○家集の内

○宮の粟田殿におはします比、實方の中將まわり給ひて大かたに物などの給ふに、さしよりて忘れ給ひにけりなど、云へど、いらへもせて立にける、即ち云ひ送りける。

忘れずや又忘れずよ瓦屋の下やく煙下むせびつ、

○住吉に詣で、いととく歸りきなん、その程ゆめ忘れ給ふなど、云ひたるに、

何方かしげりまさると忘れ草よし住吉にながらへてみよ

○人の許にはじめてつかはす

たよりある風もや吹くと松島によせて久しきあまの釣船

○ぼたいと云ふ處に、説教きくとて、人の許よりとく歸りね、おぼつかなきにとあるに、

求めてもかふる述の露をねきてうき世に我は何か歸らん

○みの、五節出させ給ひし年、辰の日の夕さり、女房も童もねしなべて、青摺の装、唐衣に、



山蓋してゑかきて、赤紐など結びかけたれば、殿上の人々など珍しかりて、をみの女房とつけて、立まじりたり、人よりも頭中將よういし、けうらし給ふ右兵衛など、かたぬぎ、ひきくつろひなどするに、紐とくれば

足引の山井の水の氷れるをいかでか紐のとくるなるらん

### 八、和泉式部

平安朝に於ける女流歌人の一人なり、越前守大江雅致の女なるが、和泉守橘道貞の妻となりたるを以て、其夫の官によりて和泉式部と呼ばれたり。夫道貞歿して後は、一條天皇の中宮上東門院に仕へて才女の名知られしが、のち又丹後守藤原保昌に嫁して、任國の丹後に下れり。

かつて京都に居ける頃、下賀茂の社に參詣せしに、履きたる藁靴に足をくはれて紙を巻き居たりしかば、神主忠頼これを見て、

千早振かみ(紙、上、神)を足にまく者か

と戯れしに、式部直に下の句をつきて、

これをぞ下の社とはいふ

と答へしとぞ。以て和歌の力に滑稽の才を兼ねたるを見るべし。

式部佛法に歸依する心深く、法華經の從冥入冥永不聞佛名といふ文句を用ゐつゝ、播州書寫山の性空上人に贈るとて、

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき

はるかに照らせ山の端の月

とよみたるは拾遺集にも入りて名高き歌なり。式部始め橘道貞に嫁せし時一女を生めり、小式部といふ。後に保昌に嫁するや拗へゆきけるが、詠歌の法を母に習ひて、やがて譽高く世に聞ゆ、めされて上東門院の官女となりぬ。母は保昌と共に丹後に下りし後、歌合の催しあるとて小式部も讀みての數に入りたりしが、中納言定頼小式部に向ひて、歌はいかゞせさせ給ふ、丹後へは人をつかはされしや、使はまだ參らずや、いかに心もとなく思すらんなど戯れ戯りたるに、小式部うの袖をとらへつゝ、大江山いくの、道の遠ければ

まだふみ(踏。文)も見ず天の橋立

とよみて舌を捲かしめたる物語あり。

和泉式部は晩年に尼になりて、御堂關白より贈られし小御堂といふ寺に住み、専ら佛道修行にのみ身を委ねたり。遺稿は和泉式部日記と和泉式部集とあり。

○和泉式部日記の一節

かく云ふ程に、十月にもなりぬ十日の程あはしましけり。奥は暗う恐ろしければ、端近う打ふさせ給ひて、哀れなる事の限を、のたまはするに、かひなくはあらず。見れば月の曇りてしぐるゝ程なり。わざとあはれなる様を、作り出でたる様なり。思ひ亂るゝ程の心地は、いとそゝる寒きや。宮御らんじて、人の便なきにのみ云ふめる、怪しきわざかな、こゝに斯くてあるよと、哀に思ばされて、女の寐たる様にて、思ひ亂れ臥したるを、やゝ驚かし給ひて、

時雨にも露にもあらず寐たる夜は怪しくぬるゝ手枕の袖

との給はすれど、萬に物のみわりなく、たほゆるに、御答きこゆべき心ちもせねば、物も聞かせて、唯月の影に、涙の落つるを、哀と御らんじて、など答はし給はぬ。はかなき事申し侍るも、心つきなしと思しけるにこそとあれば、いかに侍るにか、心地のかき亂る様に侍る。耳にはとまらぬにも侍らずとて、よみ試みさせ給へ。手枕の袖と云ふ事、忘るゝ折や侍りけると、職れ言に云ひなして、あはれなりつる夜の氣色も、かくのみ云ふ程に、殊にたのもしき人なども、なきなめりかしと、心苦しう思して、今の間いかゞとの給はせたる、返事

今朝のまに今はひねらん夢ばかり寐ると見ゆつる手枕の袖  
ときこそたり。

○紅葉の歌

この頃の山の紅葉、いかにをかしからん、いざさせ給へ、見んと、のたまはすれば、いとよく侍るなりと聞ゆて、その日になりて、今日は物忌に、とちこめられてあればなん、いと口惜しう、これ過していかならずと、のたまはせたるに、其夜しぐれ、常よりも木々の木の葉、残りありげなくきこゆるに、目をさまして、風の前なると、ひとりごちて、昔散りぬらむかし。昨日見でと、口惜う思ひ明したる翌朝、かれより、

神無月世にふりにたる時雨とや今日のながめを飽す見るらん

さては口惜しうこそと、の給せたれば、

時雨かも何にぬれたる袂すと定めかねてすむれもながむる

とて、まことや

紅葉ば、夜半のしぐれにあらじかし昨日山邊を見たらましかば

とありけるを、御覽じて、

ろよそよなどて山邊を見ざりけむ今朝は悔れど何のかひなし

とて、はしに

あらじと思ふものから紅葉の散りや残れるいと尋ね見む

どの給はせられたれば、

うつろはぬ常磐の山も紅葉せばさかし行きてのどくを見む

愚ならむ方にや、侍らむとて、一日あはしめしたりした、障る事ありて、聞ゆるをせぬとて申し、思はずしや、

高瀬船早やこぎ出でよなはるとさしかへりにし蘆間分けたり

と聞ゆるせたるを、思はずし忘れたるにや、

山邊には車にのりて行へきを高瀬の船はさかへるべき

とあれば、

もみぢ葉の見に来るまでは散らさらば高瀬の船のさかへることがれんとて、其日も暮れぬ。

和歌 (家集)

○春

春霞たつやれそきと山河の岩間をくゆる音きこゆなり

○ 我宿の櫻はかひもなかりけりあるじからこそ人も見に来れ

○ 河邊なる處は更に多かるを井手にしも咲く山吹の花

○ 花は皆散りはてぬめり春深きふぢだに散るな今暫し見ん

○夏

○ 夏の日の足にあたればさしなからはかなく消る道芝の露

○ かざしと誰か思はん千早振神のまれくゆるすあふひを

○ 手に結ぶ水さへぬるき夏の日は涼しき風もかひなかりけり

○ 釜火はこの下草も暗からずさ月の闇は名のみなりけり

○ 聲きけば暑さもまざる蟬の羽のうすき衣は身に着たれ共

○ 秋

○ 朝風にけふ驚きて敷ふれば一夜の程に秋は來にけり

○ うしと思ふ我身の秋にあらねども萬につけて物ぞ悲しき

○ 根ごしにもほらば堀らなん女郎花人に後るゝ名をば残さむ

○ 鈴蟲の聲ふり立つる秋の夜は哀に物のなりまざるかな

○ とも角も散らさぬわざはしてましを一夜ばかりの紅葉なりせば

○ 冬

○ 秋はてゝ今はと枯るゝ淺芽生は人の心に似たりける哉

○ ぬる人を起すともなき埋火を見つゝはかなく明かす夜なく

○ 見渡せばまきの炭焼きひをぬるみ大原山の雪のむらぎを

○ さびしさに煙をだにもたゝしとて柴折りたける冬の山里

○ 敷ふれば年の残りもなかりけり老ぬる計り悲しきはなし

九、赤染衛門

母は平兼盛の妻なりしが、衛門を懐胎せしまま離縁となり、歸りてこれを生み、後携へて再び檢非違使右衛門尉、赤染時用方に嫁ぎしに、時用これをよのれが子として養ひしかば、その姓をとりて赤染衛門とは呼べるなり。

衛門はじめ攝政關白道長公の妻倫子に仕へしが、後に大江匡衡に嫁ぎたれば、匡衡衛門などとも呼ば

れたりとか。

和歌の才に富み、當時和泉式部と名を等くす。後世には赤染衛門の方を却て褒むる人多くある程なれども、衛門の曾てはこりたる色のなき事は、紫式部日記にも云はれたり。

丹波の守の北の方とは、宮、殿などのわたりに、匡衡衛門とぞいひ侍る。ことにやんごとなき程ならねど、誠にゆき／＼しき歌よみにて、萬の事につけてよみちらさねど、聞えたる限は、はかなき折ふしの事も、それこそはづかしき口つきに侍れ。

この一節を見ても、衛門の人となりは知らるるなり。

ある時夫匡衡官よりかへりて、何事か物思はしけなる顔付なりければ、衛門怪みて、何をかさは思ひに沈み給ふると問ふに、この頃藤原公任、中納言を辭せんとして、表文の草稿を當時の名儒、紀齊名、大江以言などに頼みしに皆意にあはずとて、更に我に依頼したり。されど齊名、以言等の能はざる處を、我が驚才いかでか彼の心に叶ふやう書き得べけむ。筆とる身の耻辱げに口惜しく思ひて、かくは心を痛ますすと答へけるに、衛門暫らく考へていひけるやう、公任卿は、人に誇る性質なれば、祖先の歴々なるに、近年官位停滯して、不平甚しきよしを書き給へ、彼の卿必ず喜ばんと、此に於て匡衡は筆を下しものしけるに、公任果して大に満足し、直に之を用ゐたり。衛門が才多くは此類也。傳へいふ、其子舉周曾て重病にかゝり、久しく癒えず。衛門これを憂ひて、住吉神社に祈り、おのが

命を以て代らんことを請ひ、三本の幣を奉りて、之に各和歌一首を附しぬ。其歌の一に曰く、

代らんと祈る命はをしからて

さても別れん事ぞかなしき

其夜白髮の老翁出て來りて、此幣を社内に納むと夢み、後幾もなくして病癒えたりと。至誠よく神を動かしけるにや。

子舉周これを聞きて、いたく驚き、我が病癒えたりとも、二人となき母を殺して何かはせん、とて泣きて住吉の社に母の壽を祈りけるに、神もあはれとや思しけむ、母子とも、恙なかりしとぞ。

和歌をあつめて赤染衛門集といふ。榮花物語も此の人の作なりと雖も、詳ならず。女あり、江侍従といふ。また和歌を以て知らる。

### 和歌 (赤染家集)

#### ○春

○長谷に詣でし道にて子日して

○ 思事皆みちすがら子日してみのゝを山の松を引かなん

來て鳴かば哀ならまし鶯の花によそなる春もありけり

○

雪をのみ花とは見しか打かへし花も雪かど見ゆる春かな

○

花の色は散るをだに見て散にけり慰めに見ん春の夜の月

○花盛に雨いみじく降し頃

散りやすき雨にやうつる櫻花見るまの色を誰にとはまし

○庭に積もる花の風の吹散すに

散てだに見るべきものを櫻花庭をもさはぐ風のころよ

○

○三月三十日花の散を

惜みにし花の散らずは今日もたい春行どころよそに見ましを

○夏

○

珍しく今日聞く聲を時鳥遠山里はみいなれぬらん

○月のあかき夜

五月雨の空だにすめる月かげに涙の雨は晴るゝ夜もなし

○草の繁きが中に山吹の咲きたりしを

我宿は八重葎かど見し程に入重山吹の花ぞにはへる

○朝顔夕顔植えて見し頃

ひる間こそ慰む方はなかりけれ朝夕がほの花もなきまは

○山家卯花

山里の卯の花がくれ時鳥うしろめたきをしかや鳴くらん

○あやめ

五月雨のいつか過ても菖蒲草軒のしづくは玉と見ゆけり

○六月晦日庚申なりしに

夜もすがら置きける露の涼さは秋のとなりや近くなるらん

○秋

○秋雨の降る日萩の花につけて

妻乞に鹿はしからん秋はぎを雨さへしぼる惜き頃かな

○すしき多かる野にて

何方に行止らまし花すしきをちにも招くこちかとも見ゆ

○

花と見て野邊に心をやりつれば宿にて千代の秋は經ぬべし

○嵯峨の花あかしかりけるを見て

秋の野の花見る程の心をば行とや云はん止るとや云はん

○御障子の繪に

掘り植うる草葉に蟲の音を添へて千代の秋まで聲をきかなん

○

起て見る菊のま垣の露の上にかねの浪の影ぞ移れる

○前女院菊合に

露よりも玉のうてなに菊の花うつろひてこそ色まさりけれ

○

誰にかは告げにやるべき紅葉ばと思ふばかりに見ん人もがな

○

つとにとて折るもみぢ葉も枯にけり嵐のいたく吹きしまされに

○冬

○

竹の葉に結べる霜のとけぬればもとの露ともなりにける哉

○

霜枯の野邊に初吹く風の音の身にしむばかり物をこそ思へ

○

神無月有明の空のしぐるゝも又我ならぬ人や見るらん

○打出の濱に雪深く積りたりしに

關越にてあふみ路とこる思ひつれ雪の白濱こそは何處ぞ

○

あともなく雪降里の荒れたるを何れ昔の垣根と見える

○戀

○國より云ひおこせし返し

逢見ても別の後のつらさをば只我のみや思ひしらまし

○たのめてねはせずなりにし人に

安らばで寝なましものを小夜更て傾くまでの月を見し哉

○心にもあらぬ事ありて久しう訪れて

耻たはて忘れはつるをつらしとも思はぬ程になりける哉

○津の國に行て

戀しさに難波のことも思はれずたれ住吉のまつと云ひけん

○常に逢ふ事も難ければ

我戀は逆さまにこそなりにけれ昔を今になして思へば

○花を見て

去年の春散にし花は咲にけりあふも別るもかゝらましかば

○雑

○雨ふりもの心ばそし

さらてだに訪ふ人もなき山里に雨にや言をつてんとすらん

○火ともして経よみけるを

消ゆるべき法の末にや成りぬらん火をともして予聞べかりける

○大井川に舟こぎ渡るを見て

雨やまぬかけをし渡る高瀬舟をち方人の来るかとぞ待つ

○入相の鐘に心細かりければ

はかなくて来る入相の聲きけと我世つくとは覺はやはする

### 十、伊勢大輔

大輔は、大中臣能宣の孫にして、父は輔親とて伊勢神宮の祭主なり。よりて伊勢大輔とはいへるなり。一條院の御時、中宮彰子(上東門院)に仕へ奉れり。和歌に巧にして、殊に機敏の才に富む。紫式部、和泉式部、小式部等と齊しく數へられぬ。大輔の始めて宮に仕へ奉るや、未だ若かりけるが、關白道長公傍にあり、たま／＼櫻花を奉るものありけるに、公、筆硯をとりて、大輔に和歌を題せしめたり。大輔筆を取りて直に、

古への奈良の都の八重櫻

今日九重に匂ひぬるかな

と書きたり。公を始め、人々大きにめでたりとぞ。

大輔、後に越前守高階成順の妻となり、いとむつまじく、世を過したり。



六條の大貳、堀河の大貳などいふ人は、大輔の孫に當れるよし、宇治大納言物語に見えたり。  
みるめこそ近江の海のかたからめ

吹きだにかよへ磯賀の浦風

この歌は、大輔の始めて成順に嫁せしをり、夫、石山にこもりて、音信の無かりし程に、よみやりしが、この歌によりて、益情交こまやかになりけるよし、同物語に見えたり。

○和歌(家集)

○春

○正月一日

蘆もゆる沼の氷はどけたれど行くかたもなき谷の下水

○子日に雪ふる

人は皆野邊の小松を引きに行け今朝の若菜は雪やつむらん

○雲林院の櫻を都のに比べよと人の云へりしかば

白雲のかゝる山邊の櫻花これはこれぞと君に折りける

○夏

○時鳥

聞つとも聞かずともなき時鳥心まどはす小夜の一聲

○卯の花

卯の花の咲ける垣根は白波のたつたの川のお關とぞ見る

○さみだれ

いかばかりたこの裳もそぼつらん雲間も見えぬ頃の五月雨

○六月はらひ

水上もあらぶる心あらじかし波も夏越のみそぎしつれば

○秋

○駒むかへ

引つれて来る秋毎に逢坂の山の端出づる望月の駒

○静かなる有明の月

有明の月ばかりこそ通ひけれ来る人なしの宿の庭には

○七月七日

七夕の夜の衣をきたる夜はかへすうらをも知らせずもがな

○鹿

夕霧に妻まどはせる鹿の音や夜寝る時も驚かるらん

○古き家に紅葉散りねひたり

古里はしぐれの木間もるとてや散る紅葉はを風の吹らん

○冬

○千鳥

行方は小夜深けれど千鳥鳴く佐保の河原は過ぎうかりけり

○雪中竹

枝たわみ雪ふりつめばなよ竹の末葉も見えずふしかへりつゝ

○山里の時雨

訪ふ人もなき山里のむら時雨二より三より驚かすかな

○雑

○火佛日同人

諸共にむすびし水はたはにしを何をかそゝ今日佛に

○あしきの池

うら若き芦まの池の水の色は淺みどりにう波は立ける

○笠取山

降らば降れ笠取山の木の下は秋の時雨ももらじと思ふ

○松

昔より名にたかさごの松なれば雲の上まで枝ぞさしける

○池水

池水の世々に久しく澄ぬれば底の玉藻も光見えけり

○戀

○音せぬ人に冬の末つ方

忘れられて年暮れはつる冬草の枯葉は人も尋ねざりけり

○伏見の里の戀

つきもせず戀する人は寐もいらで伏見の里の夜こそ長けれ

○戀

塵つもあり床の枕もさびにけり戀する人の寐る夜なければ

○秋來る人に

煙こそたつとも見わぬ人しれず戀に焦がるゝ秋と知らなん

○世の中さわがしき頃久しく音せぬに  
なき敷に思ひなしてやとはざらんまた有明の月まつ物を

十一、大貳三位

名は賢子、父は左衛門佐藤原宣孝、母は紫式部なり。太宰大貳高階成章に嫁し、後一條院の御乳母となり、三位に叙せられたるを以て、大貳三位とはよべるなり。

三位母に似て詞章艶麗なり。かの狭衣物語は即ち此女の作にして、假に狭衣の大將といふ人を主人公にたてゝものしたるは、母の源氏物語にならひたるなるべし。故にその體裁は略ぼ同じけれども、意匠に至りては、源語に及ばざること遠し。

狭衣は源氏に四十年ばかりおくれ世に出でしが、當時は人々母のおもかけありとて、稱賛かぎりなかりきとぞ。今の世にありても、源氏につぎて人々のもてはやす所なり。

ありま山いなのお、原風ふけば  
いてそよ人をわすれやはする

こは世に知られたる三位の歌なり。

○龜山の麓 (狭衣物語)

龜山の麓に、慈心寺など云ふわたりに、故宮のいかめしき寺建て給ひて、ともすればこもりあて、不  
断の念佛など行ひ給ふを、此秋は御心苦しうて、は渡り給はざりつれば、長月にだに、まされなく念  
佛もして、やがて消え果てんと思はしてわたり給ふなり。

葛はひかる、松かけの景色も久しう見給はざりつる程に、いとさびしきさまさりけり。いと枯れは  
てなん頃ほひ、いかやうにながめ暮し給はんと、見ずなりなん世の事のみ、心にかゝり給ひて、うし  
ろめたう、いみじく思はさるゝに、いかでかくしも思はじ、さりとともむげに徒らになり給ふべき、御  
あり様にあらぬものを、我身の行きまとはん道のほだしは、いとみじかるべきを、かつは思し慰  
めつゝ、四十九日初め給ひて、日々に尊くあはれなる事どもを、きき給ふまゝに、なごで年頃もたし、  
とくかやうになりて、罪を少し失はざりつらんと、くやしければ、苦しきもせちに念じつゝ、行ひ給  
へど、露よりも先にやと見ゆる折がちなりまさり給ふ。大將は日毎に、いと戀にとぶらひきこ給  
ふを、ありがたき嬉しき御心と、喜びきこほさせ給ふに、みづからも忍びて渡り給へり。宰相もわか  
らさまに京に出て給ひけり。

廿日なれば月さへ遅く出る頃にて、ことごとくべき垣根の覺束なければ、こゝかしこと行みつゝ、見め  
くり給ふに、いと大なる堂ども、あまたありて、三昧つとめ行ふけしき尊げにて、僧坊ども數多續き

などはせで、こゝかしこ竹の林ばかり、をぐらうなしつゝ、長き世の住居と思ひたるも、目とまりて  
あはれに、うらやましくぞ思ほさる。山より僅かに落ちくる水を、ほのく竹の種どもを、蜘蛛手に  
まかせやりつゝ、待ちうけたる様も、氷のくさび固めたらん頃ほひは、いかゞと心細げなるさま限り  
なし。居給へる處を見ゆるは、寺よりは少しのきて予ありける。帯にせる細谷川の音さやかに流れて  
同じき岩のたゞすまひも、心あるけしきしるく、時どりふしの花紅葉の木々ども、敷をつくしたると  
見えて、見どころ多くなされたりける。されど浅茅が原も、殊に尋ねる人もなかりけると見えて、  
心のまゝに色をつくして、亂れあひたる草前裁どもに、露の白玉と心得て、蟲の音も外よりは耳のい  
とまなかりけり。軒を争ふ八重葎も、げに人こそ見えぬ秋來しけしきは、とく知られぬへかりけり。稻  
葉の風も耳近くは聞習ひ給はぬに、稻負鳥さへたどなふに、さまゞに様かはりたる心地して、物ね  
ぼろげなり。

されど此處には、人あるけしきもせで、九躰の阿彌陀おはする御堂に、やがておはするなりけり。堂  
のかざりなど、極樂もかくやと思ひやられて、いときらゝかに、貴かりけるを、など今迄見ざりつらん  
と口惜し、坊どもに小法師ばらの、物ずんじなどする聲ばかりは、ほのかにきこえて、例ならずわづ  
らふ人のあたりとも覺えず。靜に心細げなり。懺法阿彌陀經などの聲ばかり予きこゆる。  
人のこゑする處によりて、通季かくなんと、きこゆれば驚き給ひて、やがて臥し給へる母屋の御

簾のまへに、しどね打しきて入れ奉り給へり。

月はなけれども、星の光ばかりさやかなるに、軒近ういたくたどゞしき程にもあらねば、大方御容  
休うちふるまひ給へるさまなど、あなめでたと見給へるに、風に從ひくゆり入たる匂ひさへ、げに  
こそなべての人にはまさりけり。

よろづ思ひやり聞ゆるよりも、今少しめでたくはづかしげなる、御ありさまをもやなど、思ひよりけ  
るに、たほけなくいとつゝましく覺ゆるものから、又かゝらん人をこそ年に一夜のわたりにても、  
待ちつけ見るべかりけれ。見つる世になどで、はかくしき御ありさまに、もてなしきこえずなりぬ  
らんと、苦しき御心地にも、いと胸さわぎまさりて、せちに頭もたげて予見やり給ふ。

十一、相摸

相摸は、源頼光の女なり。後冷泉天皇の時、入道一品の宮の女房にて、名を乙侍従といへり。相摸守  
公資と深く晤らひて、終にその妻となれり。歌人として世にその名高し。

順徳院の八雲御抄に、  
女の歌にては、赤染衛門、紫式部、相摸などは、昔にも耻ぢざる歌人なり云々  
又十訓抄に

大江公資、大外記を所望しける時、僉議ありて、拜任よろしかるべきよし、諸卿定め申されけるに、彼のおとこの意見に曰く（彼のおとこは、小野宮右大臣實資をいふ）公資は相摸を懐抱して秀歌案せん程に、公事を闕如云々。

とあるにても、相摸の有名なる歌人なりし事は知り得べきなり。

一説に、相摸は大江公資の女にて、從三位濟政の室となれりといへるは、いかゞあらん。

○家の集の内○

いと我ればかりとのみねほゆる、あつさのろまに朽ちはてける深山木を、いかばかりと高き影もやとたのみし折りは、残りゆかしう、花紅葉雨風につけても、ちのつから散る言の葉を、書き置きたらば、みくつによらんながれ成とも、あさき方にやと、せきとめてしを、あいなう袖に、涙のかゝりける身にと、思ひしらはてぬるを、さしもあもなき事を、いまさらにもなき、水々きの、あとにまかして、あらはしてむも、いとうしろめたけれど、けふや我がよとのみ、物あはれなる、露の命にもあくれ、世の中に、若し思ひ出でん人もあらば、入しれぬ形見ともなれかしとて、しのびもはてずなりにける、昔のことをば、忘れはてにければ、今からのをだにもと、思ふほどもなほ古めかしき。

和歌

○春

○ 鶯の鳴く音の空になかりせば都の人をいかで見ましや

○ 其方と行末しらるゝ春ならば關すゑてまし春日野の原

○ 霜かれん程も遠げに見ゆる哉今もえいつるにはの若草

○ 外よりはのどけき宿の庭櫻風のこゝろも空によくらし

○ 澤水に蛙なくらん山吹の花の盛りはつきせざらん

○夏

○ 緑なる松にかゝれる藤涙はむらごの糸と見ゆるなるべし

○ 下にのみくゆる我身は蚊遣火の煙ばかりを事とやは見る

○ 涼しさを尋ね來つれば蟬の聲きくに木影のありがたき哉

○ うくて世にふる野の沼の菖蒲草ねかくる袖は乾くまもなし

○ みたらしに夏越の萩する人を見るに我さへ頼もしき哉

○ 秋

○ 一重だにあつかりつるを夏衣重ね着るまで秋風ぞ吹く

○ 野邊毎に折りこそつくせ女郎花伏見の里はむぐらはふまで

○ 浅茅原野分にあへる露よりも尙ありがたき身はいかにせん

○ 雲井まで故里こふる秋の夜は厂の涙やつゆけかるらん

○ 赤かりし紅葉の色も散りぬれば秋の別も悲しかりけり

○ 冬

○ 蟲の音も秋すぎぬれば草むらにこり居る露の霜結ぶころ

○ 初霜は處わかずや置つらん移ろひるむる菊のまがきに

○ 都にも初雪ふれば小野山のまきの炭がまたきまさるらん

○ 冬河のをしの浮寐やいかならん常の床だに冴ゆる霜夜に

○ 煙たつ富士の高嶺に見る雪は思ひの外に消えずありける

○ 埋火をよそに見るこそ悲しけれ消ゆれば我も灰となる身を

○ 數ふれば年の終りになりけり我身の果ぞいと悲しき

○ 戀

○ かきすつる蟹のたぐ細打はへて物なげかしく思はゆる哉

○ 思ふこと鳴門の浦に拾ひつゝかひありけりと知らせてしがな

○ 日のもとの山となる迄積るとも言の葉見れば誰かいとはん

○ 波のこす松は色こそまさりけれ浅く願むな思ひそめてき

○ まどろめばさめぬる夢の世なれども嬉しき事を見るよしもおま

○ 清めつゝ書きこそ流せ水莖のしるしも早くあらはれよとて

十三、菅原孝標女

菅原道真公六世の孫なる、右中辨菅原孝標朝臣の女、母は陸奥守藤原倫寧朝臣の女、右大將道綱の母の妹なり。はじめは祐子内親王家の女房にして、後に信濃守橘俊通の妻になり、肥後守仲俊を生めり。

兄あり和泉守定義といふ。紀傳の道を業とし、令聞父祖に耻ぢざる人にして、北野本殿七座の内の和泉殿といふは、この人の事なりとす。更科日記はこの女の手になりしものなるが、昔中、康平元年にありし事どもを載せられたれば、後冷泉天皇の末つ方に、筆を起し、ものなるべし。即ち紀元一千七百十餘年にして、今を距る八百四十餘年前の頃なり。

更科日記と名つけしは、夫俊通、天喜五年信濃守となりて任國に赴き、其後康平元年、京師に歸りて身まかりしに、ある夜、甥のきたりしかば、

月もいで、闇にくれたる姨捨に

何とてこよひ尋ねきつらん

と詠めりし事、終のかたに見ゆ。この歌などよりや、負せつらんといふ説あり 更科娘捨は、ともに信濃の地名にして、月の名所なれば、或はそのちなみにて、かくは名付けしならん。

孝標女、幼き時より好みて物語類を繙き、片田舎に生ひ立ち、書を得る事、容易ならざりしかば、藥師佛を作りて、物語の世にあるかぎりを見せ給へと祈りしとぞ。

又伯母なる人の田舎より都に上りたる所にわたりて、こゝかしこにて物語書を買ひあつめ、何くれの物語をやがて、一ふくろ得て歸り、ひるは日ぐらし、夜は夢のさめたるをりく讀みたりしなど其の心掛の深かりし程知るべし。

此日記の外に、

夜半の寐覺、三津の濱松、みづからくゆる、朝倉、

などの著述あり、されど今の世に傳はれるは、夜半の寐覺五卷、三津の濱松四卷、の寫本あるのみ、そのよみたる歌、新古今集より後新拾遺集までに、十四首入りたり。いづれもすぐれてめでたし。

### 更科日記の一節

其春いみじう、さわがしうて、まづ里の渡りの月かけ、あはれに見し乳母も、三月朔日になくなりぬ。せん方なく思ひなげくに、物語のゆかしさも覺えずなりぬ。いみじく泣きくらして、見いだしたれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花残りなく散りみだる。

散る花も又こん春は見もやせん

やがて別れし人ぞこひしき

又きけば、侍従の大納言の御女、なくなり給ひぬなり。殿の中將のおびしなげくなる様、我れもの、悲しき折なれば、いみじく哀なりと聞く。のぼりつきたりし時、これ手本にせよとて、此姫君の御手を取らせたりしを、さよ更けて寐さめざりせばなど書きて「高部山谷に煙のもえた、ばはかなく見えし我ど知らなん」と、云ひしらずをかしげに、めてたく書き給へるを見て、いと涙をそへまざる。かくのみ思ひくじたるを、心も慰めんと、心ぐるしがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにちのづから慰み行く。紫のゆかりを見て、ついきの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。されど未だ都なれぬ程にて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしく覺ゆるまゝに、此源氏物語一の巻よりして、皆見せ給へと、心の内に祈る。親の太秦ウツクサにこもり給へるにも、こと事なく、この事を申して、いでんまゝに、此物語見はてんと思へど見えす。いと口惜しく思ひなげかるゝに、叔母なる人の、田舎よりのぼりたる處に、わたりたれば、いとうつくしうおひなりにけりなど、あはれがり珍らしがりて、歸るに、何をか奉らん、まめくしきものは、まさなかりなん、ゆかしくし給ふなる物を奉らんとて、源氏の五十餘巻、櫃に入りながら、在中將、とほ君、せり川、しら、あさうづ、など云ふ物語ども、一袋とり入れて、得てかへる心地の、うれしさやいみじきや。はしるく僅かに見



つゝ心もせず、心もどなく思ひし源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内に打臥して、ひき出でつゝ見る心地、きさきの位は何かかせん、ひるは日くらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、是を見るより、外の事なければ、たのづから、名などは、そらにたげはうかぶを、いみじき事に思ふに、いと情けなる僧の、黄なる地の袈裟きたるが来て、法華經五巻を、とく習へと云ふを見れど、人にも語らず。ならはんとも思ひかけず。物語の事をのみ、心にしめて、我はこのごろわろきぞかし。さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじう長くなりなん。光源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそ、あらめと思ひけるころ、まづいとはかなく浅まし。五月朔日ごろ、つま近き花桶の、いと白く散りたるを眺て、

時ならず降る雪かどぞながめまし

花桶の 薫らざりせば

足柄と云ひし山の麓に、くらがり渡りたりし木のやうに、繁れる所なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山邊よりもげに、いみじく面白く、錦をひける様なるに、外より来る人の、今まありつる道に、紅葉のいと面白き所のありつると云ふに、と、

何處にも劣らじ物を我宿の

世をあきはつる景色ばかりは

#### 十四、待賢門院加賀

ならびなき歌よみにして、秀歌をよみて、「ふし柴の加賀」と呼ばれたる人なり。あるとき、かねてより思ひしことよふし柴の

こるばかりなるなげきせんとは

とよみて年比もちたりけるが、おはれにやさしき歌なり。同じくは、さるべき人に、わりなく契りて、それに忘られたらん時によみてこそと思ひ居たりけるに、折しも、花園の大臣に思はれて、さしも睦まじかりけるを、程なく忘られてたゞになりしかば、いざこの時よきて、この歌かきて贈りければ、大臣限りなく、感じ喜びおはれがり給へりぞ。藤原の俊成卿、この歌を撰びて千載集の中に入られたり。これより世の人、待賢門院の加賀を、「ふし柴の加賀」と云ひける。

#### ○和歌

##### ○春

##### ○なほ寒き

山陰の伏屋は春もしらねばや軒端の垂氷とくる間もなき

##### ○若菜

山賤の柴の垣根のうちにはせみ摘る若菜のほどもなきかな

○柳

山賊の園生にかこふうきしはの絶間に見ゆる青柳の糸

○垣へだてたる花

飽す見る梢の花し中垣のこなたに散らす風も吹かなん

○すみれ

行きやらで心のとまる春の野に暫し藎の花やつまゝし

まど近きま垣の中に咲をころつば藎とは云ふへかりけれ

○霞

霜枯てあらはに見えし芦の屋の小屋のへだては霞なりけり

○夏

○時鳥

時鳥雲井に過る一聲は空耳かどうあやまたれける

○山吹

咲にけり苗代水にかけ見えて田中の里の山ふきの花

○五月雨

瀬を早み駒ひきなへし安河に船渡りするさみだれの暁

○あやめ

こやの池に生ふる菖蒲の長き根は引く白糸の心地こそすれ

○苗代

苗代はあのがひきく急ぐとも秋のたのみの定めなき哉

○

何とかは急ぎもたゝむ夏衣うき身をかふる今日にしあらねば

○秋

○鹿

さを鹿の妻こふる音にわぢきなく我さへ袖をぬらしつる哉

さらぬだに夕べさびしき山里の霧のまがきに小鹿なくなり

○萩

露しげき花色衣かへるとも又も来て見ん野邊の秋はぎ

○虫

露しげき野邊にならひてきりくす我が手枕の下に鳴くなり

○月

長き夜の月を思へば月影の傾ふく方にすむ心かな  
住むかひのなき世の中の思出は浮雲かけぬ秋の夜の月

○露

はかなさを我身の上によそふれば袂にかゝる秋の夕露

○

立田<sup>たまたし</sup>姫唐までも通へばや秋の梢のからにしきなる

○冬

○時雨

かき曇り時雨は音もなければも名残にふるは木の葉なりけり  
人も來ぬ深山の里に音するはたそがれ時のしぐれなりけり

○千鳥

あみかくる佐保の川瀬に立つ千鳥又いつ方へ鳴渡るらん  
汐のみつ磯邊の千鳥渡なれて共に立ちぬる聲なきこゆる

○

岩そよく汐風寒みかたしきの入江を傳ふあぢのむら鳥

○雪

降雪に園のなよ竹折れふして今朝は隣のへだてなきかな

○

昔など年の終りを急ぎけむ積もれば老となりぬるものを

○

世を怨み身をなげきつゝ明暮にとしも心もつきはてにけり



○戀

○

斯くどたに云はぬに茂き亂れ芦の如何なるふしに知らせそめまし  
荒磯の岩に碎くる浪なれやつれなき人にかくる心は

○

夢の事見しは人にも醒らぬに如何に遠へて逢はぬなるらん

○

見るめなみ懸ける間もなき袖の浦に忘貝をばゆこそ拾はぬ

浦かへり岩間の水のいはやと思ふ心をかでもらさん

○ 深くのみ契りし事を思ひ出では言はしてまし山河の水

頼めずはうき身のとがと歎きつゝ人の心を怨みざらまし

○ 神

色々にうき身を祈る幣なれば手向る神もいかゝ見るべき

○ 佛

長き代に迷ふさはりの雲晴て月の御顔を見るよしもがな

○ 無常

夢の世を驚きながら見る程は只まぼろしの心地ころすれ

### 十五、源經信母

經信の母は、權中納言道方卿の室なり、子經信はよく世人の知れる所にして、和歌に巧みなり。承暦の初め、正二位に進み、永承の初め、民部卿を兼ね、尋で權大納言兼皇后宮大夫に轉ず、嘉保元年太宰權帥と爲り、二年府に越く、路に筑前庭田驛に宿す、折しも八月十五夜にて空清く澄み渡れり。驛

邸に大なる槻樹の月を蔽ふありければ、經信人をして之を伐らしめ、終夜琵琶を弾じて朗吟したりし事、よく人口に膾炙せり。凡そ經信の風致かくの如し。朝廷の和歌會には、經信與かゞざる事なく、或は判者となり、或は序者となれり。かゝる子を擧げたる母の喜びやいかなりけん。經信が琵琶に巧みなりしは、母より傳へられしにや。母は琴琵琶の妙手にして、多くの弟子を持ちたる人なりき。その歌集を、經信卿母集といふ。群書類從の中に入れられたり。

### 和歌 (家集)

○ 石山にて夜一夜水鶏なく

暗くとも心易くもあけじかしいかに岩戸を叩くくひなぞ

○ 近き處の花散るを惜しむ

梢ゆゑとなりの花を折らん説さかしらなりと風や思はん

○ 時鳥の鳴かぬと人の云ふに

衣ころかたらひしはや時鳥よに我宿はすぎしと思ふ

○ 彌生三日、小さき家に桃の花を見て居る、

馬にのれる人。

賤の女の園生にたてる桃の花すけるなこれを植てみけるは

○清水にこもりて、時鳥の鳴く

いかでこの山時鳥睡らはん尙我が宿に尋ねてもこと

○朝まだき人の行きかふを見て

わけぬるか川瀬の露の絶間よりをち方人の袖の見ゆるは

○秋のくれ方、すしきの招く

我宿のまへわたりする秋ならば垣根のすしき招き止めよ

○師走のつごもり、箱のふたに、雪山

をつくりて、つごもりけりと云ふに

降りまほふ箱根の山の白雪も春のわけばやいかゞと思ふ

○霜月神まつる處に、柳さす、

常盤なる山の柳を折りとりてかはらぬ宿のしるしにはさす

### 十六 讚岐典侍

傳詳ならず、たゞ一冊讚岐典侍日記といふが有り。この書は、紀元一千七百四十年代、堀河天皇に奉仕せし時の記なり。

嘉承二年五月、堀河天皇御惱の事より筆をちろして、遂に其崩御の事に及び、翌年鳥羽天皇の御即位より、大嘗會の事までの概略を記せるなり。

文中、堀河院病重らせ給ひて、しばし苦ませ給ひし事など、細々とかきたるは、現に見奉るが如く、いと悲しともかなし。また崩御の際まで、遂に醫師をめし給はず、僧徒のみをして、祈らせたまひたりし當時のさま、及び鳥羽天皇の幼少にして、御位に上り給ひし事など、正史と互に見くらべたらんには、大に發明する事あるべきなり。

### 御神樂のさま (典侍日記)

御神樂の夜になりぬれば事の様、内侍所の神樂に違ふことなし。これは今少し今めかしく見ゆる。皆人たち小忌の姿にて、赤紐かけ、日かげの糸など、なまめかしく見ゆるに、挿頭の花のありさま見るに、臨時の祭見る心地する。皆座につきて、わのくすべき事ども、とりくにせらるゝに、殿も本末の拍子とり給ふやうるはしき。緋の装束なる殿は、今すこし人たちの座よりは、あがりて御さじきなれば、それに居させ給ひたり。使のかざしの花、さしせ給ひたる見るに、さま變りてめでたき。本の拍子、按察中納言の子の、中將のふみち、琴、そのたごいの、備中の守これみち、筆樂、安藝の前司つねたゝ、數多居たれども事長ければかゝす。斯くて御神樂初まりぬれば、本末の拍子の音、さば

かり多きに、高き處にひきあひたり。聲きしらぬ耳にもめでたし。御神樂やう／＼はで方になると聞ゆ。千歳々々萬歳々々と謡ふこそ、天照神の岩戸にこもらせ給はざりけむも、理ときこゆ。我君のかくいはけなき御齡に、世を保たせ給ふ、伊勢御神も、守りはぐみ奉らせ給ふらんと、位保たせ給はん年の數そひ、未は長井の浦のはる／＼と、濱の真砂の數つきねべく、みもすそ川の流れ、いよ／＼久しく、位の山の年へさせ給はん、賊に白玉椿、八千世に千代を添ふる春秋まで、四方の海の涙の音靜かに見たり。かくて、御遊びはてがたになりぬれば、殿御琴、治部卿もどつな、琵琶法師もどの如く宗忠中納言、笙の笛内大臣の御子の少將、まさたゞ、笛、筆、筆、もとの人々御つかひにて、殿の御聲にて、萬歳樂いだせと、我打ちそひさせ給ひ、ふたかへりばかりにて、あなたふと、伊勢の悔など、みだれ遊ばせ給ふ。宗忠の中納言拍子とりて出たす。事はてぬれば、皆裝束ぬぎかへさせ給ふ。殿の御琴の音、つま音なべてならずめでたし。皆人々祿肩にかけて立つに、殿は人には、今一きは増り参らせて、御下襲、襦袢衣かたにいだかせ給ひたるを、見まらすれば、三笠の山にさし出づる、望月の世々を経て、すみのぼらん様に見ゆ。

女流作歌 (三代集)

春の部

○題しらす

典侍 洽子

散る花のなくにしとまるものなれば我鶯に劣らましやは

○春の初の歌

二條 后

雪の内に春は來にけり鶯の氷れる涙今日やとくらん

○心地そこなひて、風にあたらじとて、

ちろしこめて侍りける間に、折れる

櫻の散り方になりけるを見て讀る、

よるか

たれこめて春の行末も知らぬ間に待し櫻もうつろひにけり

○戯れにける男の許に、庭の木の枯れ

たりける枝を折て遣はしける

兼覽王の母

萌え出る木の芽を見てもねをぞなく枯にし枝の春を知らねば

○朱雀院の櫻の面白き事を延光朝臣の

靜り侍ければ昔を思ひ出で

大將御息所

咲さかす我にな告を櫻花人づてにやは聞かんと思ひし

○贈太政大臣相別て後、或る處にてもの

こゑを聞て遣はしける

願忠朝臣母

鶯のなくなる聲は昔にて我身ひとつのあすも有かな

○あがたの井と云ふ家より

橘公平女

都人きても折らなん蛙鳴くあかたの井どの山吹の花

○女ども花見んとて野邊に出て、

因香

○子にまかり後れて侍ける頃東山にこも

中務

咲ば散る咲ねば戀し山櫻もひたはせぬ花のうへかな

○承平四年中宮賀し給ひける時の屏風

齋宮内侍

春の田を人にまかせて我はたゞ花に心をつくるころかな

○天曆御時歌合に

小貳命婦

足引の山かくれなる櫻花散りのこれりを風にしらるな

夏の部

○題しらず

更衣三條町

やよや待て山郭公ことづつてむ我れ世の中に住みわびぬとよ

○

某女

五月雨にながめくらする月なればさやかに見えず雲隠れつゝ

○五月長雨の頃久しくたは侍りにける

某女

女のもとにまかりたりければ

つれづれとながむる空のほとゞすすとふにつけて予ねはなかれける

○寛和二年内裏歌合に

道綱の母

都人ねてまつらめや郭公いまう山邊を鳴ていつなる

○題しらず

中務

夏の夜の心をしれる郭公はやも鳴かなん明もこそすれ

秋の部

○母の服にて里に待りけるに先帝の

御文賜ひける御返事に

五月雨にぬれにし袖にいとしく露世そふる秋の佗しさ

近衛 更衣

○相しりて侍ける男の久しうとはず

侍ければ長月ばかりに遣はしける

右 近

大方の秋の空だに佗しきに物思ひそふる君にもあるかな

○

平伊望朝臣女

秋ふかみよりのみ聞く白露のたが言の葉にかゝるなるらん

○かれりける男の秋とへりけるに

あ こ ぎ

とふとの秋しもまれに聞ゆるはかりにや我を人の頼めし

○長月のつごもりの日、紅葉をれこそ

て侍りければ

ちかぬが女

宇治山の紅葉を見ずば長月の過ぎ行く日をも知すやあらまし

冬の部

○親の他へまかりてをそくかへり

ければ遣はしける

某 女

神無月時雨ふるにも暮るゝ日を君待つ程はながしと思ふ

○式部卿敦實のみこに忍びて通ふ所

侍けるを後々たかくになり侍け

れば妹の前齋宮のみこの許より

此頃は如何そとありければ其返

事に

某 女

白山に雪ふりぬれば跡たてて今は越路に人も通はじ

賀の部

○東宮の生れ給へりける時まありて

よめる

典侍 因香

峯高き春日の山に出る日は曇る時なく照らすべらなり

○父の宰相の爲に賀し侍りけるに、玄

朝法師のもから衣くつかはしければ

典侍 明子



雲分る天の羽衣打きては君が千とせにぬはざらめやも

○院の殿上にて宮の御方より碁盤い

ださせ給ひける

命婦清子

斧の柄の朽ちんもしらず君が代の盡ん限りは打心せよ

○承平四年中官の賀し侍りける時の

御屏風に

齋宮内侍

色かへぬ松と竹との末の世を何れ久しと君のみぞ見ん

羈旅離別の部

○東の方より京にまうて來とて道にて

益成の女

山かくす春の霞ぞうらめしき何れ都のさかひなるらん

○小野千古が陸奥の介にまかりける時

に

千古が母

たらちねの親のまもりと相そふる心ばかりはせきな止めそ

○常陸へまかりける時、藤原のきみとし  
に讀みて遣はしける

寵

朝なげに見べき君とし頼まねば思ひ立ちぬる草枕なり

○源實が筑紫へ湯あみむとて、まかりけ  
る時、山崎に別を惜みて

筑紫遊女白女

命だに心に叶ふものならば何か別のかなしからまし

○信濃へまかりける人にたきもの遣は  
すとて

するが

信濃なる淺間の山もゆなればふしの煙のかひやなからん

○京に侍ける女因幡國へまかりければ

某女

打すぞく君もいなばの露の身は浮ぬばかりありと頼むな

○

同

唐衣たつ日をよそに聞人はかへすばかりの程も戀しき

○丈則か女の陸奥國へまかりけるに遣

はしける

藤原滋輔女

君をみの忍ぶの里へ行ものをおひつゝの山のはるけきやなぞ

○天曆の御時御めのと備後が出羽の國

にまかり下りける難に

御めのと少納言

惜むともたしや別心なる泪をだにもはやはとひむる

○同

女藏人三河

東路の草葉をわけん人よりもあくる袖ぞまづは露けき

○源弘景ものへまかりけるにさうぞく

給ふとて

三條太皇太后宮

旅人の露拂ふべき唐衣まだきも袖のねれにけるかな

○題しらす

源兼澄女

命をいかならんとは思ひこし生て別るゝ世にこそ有けれ

○物へまかる道にて尸の鳴ければ

しのぶ

草枕我のみならず雁金も旅の空には鳴き渡りけり

哀傷の部

○藤原忠房が昔し相知りたる人の

みまかりける時に

閑院

さきたゝぬ海の八千度かなしきは流るゝ水の返り來ぬなり

○時望の朝臣みまかりて後、はての比

近く成て、人の許より如何に思ふら

んと云ひあこせられたれば、

時望朝臣の妻

別にし程をはてとも思はれず戀しき事のかぎりなければ

○右大臣とのへ返し

内待のかみ

結び置したねならねども見るからにいと忍の草を摘む哉

○法皇の御服なりける時に緋色の

さいてに書て人に送り侍る

京極御息所

白波のこきもうすきも見る時はかさねて物ぞ悲かりける

○先坊失せ給ひての春、大輔につかは

しける。

玄上朝臣女

新玉の年こつらし常もなき初戀の音に予なかる。

○同し年の秋

同女

諸共になきわし秋の露ばかり暗らん物と思ひかけしや

○人をなくなして限なく戀ひて、思ひ

いりて寐たる夜の夢に見えければ、

思ひける人にかくなん

同女

時の間も慰めつらん覺ぬまは夢にだに見ぬ我予かなしき

○天曆御門かくれ給て、又の年五月五日

に、宮内卿かねみちが許に遣はしける

女藏人尙庫

さ月きてながめまされば菖蒲草思ひ絶々にし音こそ鳴かるれ

○大納言朝光が女の女、みまかりかくれ

にける事をきき侍りて

共政朝臣の女

我のみや此世は愛しと思へども君も歎くと聞そ悲しき

○むすめに後れて

中務

忘れしはしまどろむ程もなくいつかは君を夢ならでみん

○御入講捧物にかねして龜の歌を作て

よみ侍りける。

女院

どうつくす御手洗川の龜なれば法の浮木にあはぬなりけり

○性空上人のもとによみてつかはし

ける

雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入ぬべきはるかに照らせ山のはの月

雑の部

○田村の帝の御時に齋院に侍ける、明子の

みこそ、母過ちありと云ひて、齋院をか

へられむとしけるを、やみにければよめ

る

尼敬信

大空をてり行く月の清ければ雲かくせとも光り消なくに

○業平の久しく訪れざりければ

業平の母

老ぬればさらぬ別のありと云へばいよ／＼見まくほしき君哉

○御屏風の流落ちたる圖を題にてよめ

る

三條の町

思ひせく心の内の漣なれや落つとは見れど音のきこえぬ

○奈良の都に宿れりける時

二條

人ふるす里をいとひて來しかども奈良の都も憂名なりけり

○女どもと物語して別れし後につ

かはしける

陸奥

あかざりし袖の中にや入にけん我が魂のなき心地する

○帝へ奉りける

嵯峨の后

ことしげし誓しは立てれ背の間にふけらん露は出で、拂はん

○

右衛門

我のみは立もかへらぬ曉にわきても置ける袖の露かな

○法皇初て御ぐし下し給ひて山ぶみ

し給ふ間后を初め奉て女御更衣な

ど一つ院に侍ひ給ひける三年と云

ふになん、みと歸りおはしました

りける、昔の事同じ處にて御ねく

しなふけるついでに

七條の后

言の葉に絶ゆせぬ露はふくらんや昔覺ゆかまどおしたれば

○五節の舞姫にても、しめし止めらる

し事やあると、思侍りけるをさもあ

らざりければ、

藤原滋包が女

悔しくぞ天津乙女と成にける雲路尋ねる人もなきよに

○女友達の許に筑紫よりさし櫛を心

ざすとして

大江玉淵女

難波瀧なにもあらずみをつくし深き心のしるしばかりぞ

○女御左大臣にあひにけりときて

つかはしける

齋宮のみこ

春毎に行てのみ見ん年切もせずと云ふ種は生ぬとかきく

○法皇みぐしれたろし給ひての頃

七條の后

人渡す事だになきをなにかも長良の橋と身の成ぬらん

○里の女の文をかくしけるを見てえ

のめの書付け侍りける

四條御息所女

なたてつる人の心の浮橋を危きまでもふみ見つるかな

○いたく事好むよしを時の人云ふを

ききて

高津内親王

直き木に曲れる枝もあるものをけをふききすと云かはかなき

○御門に奉り給ひける

嵯峨の后

うつろはぬ心の深くありければこころ散花春にあへること

○陽成院の帝時々殿居侍らはせ給け

るを久しう召なかりければ奉ける

むさし

敷ならぬ身にねく宵の白玉は光のみます物に予有ける

○男など侍らずして年比山里にこそ

り侍ける女を、昔相知りて侍ける

人みちまかりける序に、久しうき

こぼざりけるを、こゝになりけり

と云入れて侍ければ、

土佐

あさなげに世の憂事を忍びつゝ、詠めせし間に年は経にけり

○山里に侍けるに、昔相知れる人の、何

日より此處には住むと問ければ

閑院

春やこし秋や行けんちほつかな影の朽木と世を過す身は

○兼忠朝臣母身まかりにければ、兼忠をば

故批把左大臣の家に、女をば後の宮に侍

らはせんと相定めて、二人ながら先づ批

把の家を渡し送るとて、加へ侍ける

兼忠が母の乳母

結びあきし形見の子だになかりせばなかに忍の草を摘まひし

○心にもあらぬ事を云ふ頃、男の扇に書

きつけ侍りける

土佐

身に寒くあらぬものから佗しきは人の心のあらし成けり  
ながらへば人の心も見るべきを露の命を悲しかりける

○野宮に齋宮の庚申に侍ける、松風入夜

琴と云ふ題をよみ侍ける

齋宮 女御

琴の音に峯の松風通ふらし何れの緒よりしらべ初めけん

○圓融院御時齋宮下に侍けるに母の

前齋宮諸共に越に侍りて

同

世にふれば又も越にけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん

○左大臣の、土御門左大臣の御になり

ての後、襦の形を取にあこせて侍ければ、

九條右大臣五女

年を経て立ならしつゝ、芦田鶴のいかなる方に跡止むらん

○地獄のかたを書きたるを見て

藤原道雅女

みつせ川渡るみさはもなかりけり何に衣を脱てかくらん

○伊勢の御息所生み奉りたりけるみこ

のなくなりけるが、書を書きたりけ

る繪を、藤蓋より麗景殿の女御の方

に遣はしければ、此繪を返すとて、

麗景殿宮の君

無き人の形見と思ふに怪しきは笑みても袖の濡るゝなりけり

○屏風に法師の舟にのりて漕ぎ出で

たる所、

道綱母

渡津海はあまの舟こそ有と聞く乗りたがへても漕出る哉

# 女流文學史上卷終

# 女流文學史下卷

## 第三期

(自紀元千八百五十一年  
至紀元二千二百九十年)

### 武家時代の上

井上頼因先生校閱

小森甚作

合著

上地信成

#### 總論

かの月卿雲客が、晨に嵐山の花に吟じ、夕に加茂川の月に詠じて、政務の何たるを顧みず、唯榮華驕侈に日を暮したりし平安時代は、一新して茲に源賴朝公の伊豆に起りて、天下の大權を掌握せしより、遂に武家の世とはなりぬ。されば、文學大にその影響を蒙りて、散文、韻文上に著しき變化を見るに至れり。而して、其隆盛の點より言はば、此時代の文學は、遠く前時代に及ばずと雖も、驟つて之を内容より察する時は、漸く全成の功をなさんとしたるが如し。即ち前時代の國文は、恰かも草木の春に逢ひて、花咲きたらんが如く、此時代の文學は、果實のまさに結ばんとするが如し。前者は艶麗にして優雅に、後者は濃裕にして雅美なり。尙ほ前時代と當時代とを比較對照するに、前時代の文學は、貴族の所有物の觀ありしも、當時代に至りては、その區域聊廣大となり、貴族にあらざるものまでも、

また之に興かるに至れり。和文は、前時代は優美愛すべかりしも、此時代は豪強敬すべきの風あり。又物語の文はすたれて、軍記雜史の文起れり。尙ほ注意すべきは、和文中に漢語及び佛語を混交したる文體の益、時を得し事なり。かゝる有様なれば、平安時代に於て隆盛を極めたりし女流文學は此時に至りて頓に衰へ、たゞ宮中奉仕の女官などによりて、漸く其命脈を保ちたり。

前述の如く、平安時代の文學は、脆麗柔弱なる所謂婦女文學なりしも、當時代の文學は、全く反對にして、戦亂殺伐の風に化せられ、其作れる所皆歴世的ならざるはなし。故に表面は雄健豪爽を扮飾すれども、裏面に於ては悲哀悽愴にして、外形内容共に平安時代と同じからず。其文體に至りては、前にも言ひし如く、優美なる和文に剛壯なる漢語を交へ、巧みに佛語を挿入して、悲愴悽愴の感あらしめ、又同時に切齒の嘆あらしむ。これ全く武人の嗜好に適せんが爲に、なれるものなればなり。此種類の著しきものは、平家物語、源平盛衰記、太平記、謡曲などにして、純然たる和漢混淆文なり。

また浮世の塵に汚れずとて、獨雲水に心をやりたる、隱學者の手に成りて、自から厭世主義に出でたるものは、方丈記、徒然草等なり。これ當時武人は、出陣すれば再び生還を期せざるが故に、無常を感ずる事深く、厭世の情亦厚し。されば、當時武人の意を慰ましむるものには、この種の文學ならざるべからざりしなり。作者茲に意を注ぎ、筆を執りては、天變地妖を記し、佛語を引用しては、無常の哀情を説きしかば、大に時代に適合し、盛に社會に歡迎せられたり。思ふに、武人間に於ては、平

易にして、氣概あり、流暢にして悲愴なる文體を好めるは、其性質として、素より當然の理と云ふべし。

また足利時代に至りては、草子類盛に流行したり。即ち御伽草子にして、多少滑稽の意を含み、極めて簡單に、昔の勇者の事蹟及び當時の奇談等を記したるものなり。鉢かつき、御曹子島渡り、女正草子、唐糸草子などの類是なり。

和歌は、其體裁は異なりと雖も、政權武門に移りてよりは、大宮人いよく閑を得、其隆盛却て平安時代に劣らず。勅撰私撰は更なり、百首、千首、歌合など頻りに行はれ、其結果遂に歌學といふ事さへ起りぬ。定家卿の如きその専門家にして、祕傳口授などと稱するより、人々其門に入りて之を學ぶもの多かりき。さて此祕傳口授なるものは、或る方面に於ては、大に發達を妨害せられたれども、又一方に於ては、歌道奨勵の一機關と成りしこと疑ふべくもあらず。

こゝに於て、公卿武家の別なく、歌人の名を得るものは、大抵定家卿の流を汲みて輩出せり。而して、世は戦亂打つべき、所謂闇黒時代にして、悲悽絶苦の境に呻吟しつゝも、之を蔑視せず、研究せたる爲めに、我國文學上に一光彩を放ち、よく之を徳川時代に傳へたるは、豈慶賀すべき事ならずや。

また當時に於ては、短歌の外に七五調を以ていと優美なる、今様歌盛に流行し、足利時代となりては、室町の特有文學として、今日に傳はれる、謡曲なるもの現はれ、盛に無常觀を謡歌せり。末期に至り



ては、宗祇、宗長の手によりて、連歌復興し、和歌と共に公卿及び武人の間にもはやされたり。さしも悲風慘憺たる、關黒時代に發生して、將に後世に一道の異光を放つに至らんとするは、實にこの連歌なり。今章を逐うて、いさゝか當時代の文學を詳述せん。

### 第一章 散文

既に總論にも記せしが如く、平安朝の文學と鎌倉以降の文學とは、性質に於て大なる相違あり。從て散文に於ても、彼は華奢風流の時代なれば、艶麗華美なるを好み、是は幽鬱沈痛の時代なれば、悲哀悽愴なるを嗜みたるは、これ當然の理なり。當時の散文は、軍記物類、物語類、日記及紀行文、又は隨筆等によりて、各其文體を異にし、以て特色を現はせり。思ふに當時社會一般が、彼の難澁なる漢文は避けてこれを顧みず、平易にして流暢に、且つ裝飾せる一種の文を好むに至りしが、これ我國散文の一大變遷時代ともいふべきなり。散文の代表者ともいふべき、平家物語、太平記を見るに、巧みに漢語と佛語とを混和して、慷慨悲愴ならざるはなし。而して此文體を以て後世、和漢混淆文の起原となす、此和漢混淆文が漸次調和して徳川時代に至り、遂に今日の所謂、普通文なるもの、基礎を形成したり。以て後世に及ぼせる影響の甚しきを知るべし。

軍記物の平家物語、盛衰記、太平記等は、當時戰爭の有様を知るの外、事實を敷衍して、花を惜しみ、雨を痛むにも、胸中限りなきの詩想を寄せむとつとめたるより、往々虚飾に流るゝの恐あり。隨筆文なる方丈記、徒然草は、能く鎌倉時代の思想を代表して、悲惨の涙に袖を濡さしむ。是等の文體は、和漢混淆文の上乗なるものなり、又此種の歴史文にして神皇正統記の如き、議論卓絶公明正大なる所、其學ぶべきもの少なからず。然れども、之れ等の著者は皆男子のみにして、全く女流の手をばなれたり。されば今こゝにこどくしく記すは却て煩はしければ、別に節を設けて其概略を記すことせり。

#### 第一節 雜史類

此時代に至りて、和文を以て詞語優麗に、歴史を書くこと盛なりき。今世に至るまで、人の多く歡迎するものは、凡そ左の五種なり。

水鏡	三卷	中山忠親
増鏡	十卷	作者未詳
今鏡	十卷	權大納言通親
神皇正統記	六卷	北畠親房
吉野拾遺	四卷	侍從忠房

### 第二節 軍記物類

當時尤も武人社會に歡迎せられたるは、和漢混交體なる軍記物の類なり。

既に記せし如く、軍記物類は、詞調共に佳ならんことを欲し、優麗なる和文に、剛健なる漢語を交へ、加ふるに、處々七五調を以て流麗に文章をあやなし、讀む者をして、悲愴切齒の感あらしむ。されば、武人の嗜好には尤も適したりけん、此類の著書甚だ多し。然れども、これ等は女流文學に直接の關係を有せざれば、只其主要なるもの十種を記さん。

保元物語	三卷	一説ニ	葉室時長
平語物語	三卷	一説ニ	葉室時長
平家物語	十二卷	一説ニ	信濃前司行長
源平盛衰記	四十八卷	一説ニ	葉室時長
太平記	四十卷	一説ニ	玄慈法師
義経記	八卷	作者	未詳
櫻雲記	一卷	作者	未詳
曾我物語	二卷	作者	未詳
船上記	一卷	作者	未詳

應仁記 二卷

作者 未詳

### 第三節 物語類及び隨筆類

前記の如く、當時の社會は軍記物類を愛讀したりしが、これにつぎて歡迎せられたるは、物語隨筆、草子類なり。中には雜駁なるあり、優艶なるあり、訓誡的なるあり、滑稽的なるあり、何れも柔和なる和文に、剛壯なる漢語を挟みて書けるは、武人社會の嗜好に任せたるなり、今左にその重なる著書を擧ぐ。

古今著聞集	橋成季
鳴門中納言物語	作者 未詳
四季物語	鴨長明
十訓抄	作者 未詳
秋夜長物語	作者 未詳
烏鷺合戦記	作者 未詳
庭の訓	阿佛尼
夜の鶴	阿佛尼
方丈記	鴨長明

徒然草  
東齋隨筆  
堪藪抄  
五月雨記  
嵯峨野物語  
六くさの記  
物臭太郎  
御曹子島渡り  
唐糸草子

卜部兼好  
一條兼瓦  
行譽上人  
作者未詳  
二條瓦基  
作者未詳  
作者未詳  
作者未詳  
作者未詳

等其主なるものなり。

第四節 日記及び紀行

日記及び紀行文の女子の手によりて、表はれたるは、極めて稀に見る處なれども、要するに此種の文體を形成したるは當時の特色にして、平安時代に譲らず、優に新體を開けり。日記の中、殊に名高きは、十六夜日記にして、これに次ぐは、辨内侍日記、中務内侍日記、を初とし、源光行の海道記、同親行の東關紀行、一條禪關の藤川記、今川了俊の道行ぶりに等にして、其他に男子の作として數多あり。

こは皆群書類從及び扶桑拾葉集、詞林意行集、などに納められたれば就て見るべし。今前者に就て聊か其解題を記さん。

十六夜日記 一卷

阿佛尼

こは有名なる爲家卿の後室、安嘉門院四條(後ニ阿佛尼ト云フ)の作なる事は、世人の能く知る處なり。此日記は爲家の歿後、播磨國網干莊を、庶兄爲氏押領せしを、四條は嫡子爲相に與へんとて、訴訟を起し、鎌倉へ下る旅行日記なり。其文又平安の域を脱して、鎌倉文學の性質を表示せり。本書の註釋書として完全なるは、

十六夜日記殘月抄 三册

小山田 典清

初學の人にも、極めて了解し易く説けるは、

十六夜日記講義 一册

三木 五百枝

等あり。

辨内侍日記 二卷

中務内侍

中務大輔信實の女、辨内侍の日記にして上下二卷あり。上卷は後嵯峨帝、寛元四年正月廿九日、富小路殿にて御讓位の事より書き初め、寶治三年建長と改元ありし迄の事を記し、下卷には同年十一月より、四年十月迄の事を記せり。近年博文館より出せし、文學全書中には之を納め且つ頭註をもほどこ

して世人に閱讀の便を興へたり。

中務内侍日記 一卷

中務内侍

本書は宮内卿永經の女、中務内侍の日記にして、其初め後深草帝を忍び奉ることより書き初めて、伏見帝の正應五年迄の間、自身の禁中にありて、所々の御幸に供奉せし時の様など詳しく記せり。中にも、伏見帝御即位の次第など書せるいと珍らし。本書も文學全書中に納められれば閱讀の便あり。

うたねの記 一卷

阿佛尼

以上女流の手になりしものなるが、男子の手になりしものに至りては、其數甚だ多く、殆ど枚擧するに遑わらず。

第二章 韻文

鎌倉の初期に至りては、一種奇抜なる和歌發生せんとせり。それは實朝卿の「武士の矢なみつくろふ小手の上に覆たばしる那須の篠原」てふ歌の類なり。こゝに於て、平安朝の如く華麗なる女流の詞花は遠ざけられたれども、歌を尊む風は益々隆盛を來せり。然るに間もなく、定家、家郷など勅を奉じて、新古今集を撰むや、大方奇抜なる調を避け、詞調の優麗にして、思想の幽遠なるをのみ取りしかば、全く新古今集は虚飾なる歌のみを以て充たされたり。然して、定家流の和歌勢を得るや、大に新古今

を崇拜するもの出で、當時盛に歡迎せられしかば、人々競ひて古今集を捨て、新古今集を學ぶもの多きに至り、一時發生せんとせし、奇抜なる和歌は全く跡を絶ち、毫も氣力なき歌風を構成したり。故に次で出でし續拾遺、新後撰、玉葉、續千載等又見るべき歌なきは、ことわりなり。

足利時代に至りては、二條、京極、冷泉家、など歌界を掌握し、これを以て職を世々にするに至り、秘傳口授てふ事出で、一定の範圍を設けしかば、人々これが爲に束縛せられて、爲めに自由の研究をなす能はず、只徒らに古人の糟粕を嘗めて、趣向も調も新古今集以外に出づるを厭ひしかば、益々氣力なきものとなりたり。然れども此の如き模倣歌は益々流行し、光明帝の貞和中、風雅集の撰定ありし以來、新千載、新拾遺、新後撰、新續古今、など續々あらはれ。又私撰集、家集の如きも盛に世にあらはれて、殆ど二百餘種に達す、此他百首、千首類又少なからず、豈盛なりと云ふべし。

爰に一の注意すべきは歌學なり。定家卿以來一種の學問となりし爲め、如何に秀歌を詠ずども、一定の法則を脱したるものは和歌にあらず、など云ふ弊風起れり。之が爲め、作家は一字一句、此法則に背かざらん事を計りし結果、歌學書なるものあらはれたり。其主なるは定家卿の詠歌大概を始として二條良基の近來風體、鴨長明の無名抄、順阿の井蛙抄、一條兼良の歌林良材集、今川了俊の言座集等にして、今に至るまで、歌人の座右に供ふるに至れり。

又和歌の外に、謡曲あり。即ち今日云ふ能謡にして、芝居の淨瑠璃などと同じく、能を舞ふ時に使用